

県立御坊商工高校格技場等建設に伴う

小松原Ⅱ遺跡(湯川氏館跡)

発掘調査報告書

1996・3・29

財団法人和歌山県文化財センター



卷頭図版 遺跡遠景

序 文

和歌山県の中央に位置する御坊市は、日高郡の中心として、古来より重要な地域で、旧石器時代から近世に至る集落・古墳・城跡・寺院など数多くの埋蔵文化財が存在しています。

平成7年度、当センターでは、和歌山県教育委員会から県立御坊商工高等学校の格技場等建設に伴い小松原Ⅱ遺跡（湯川氏館跡）の発掘調査の委託を受け、実施してまいりました。

調査地内には、弥生時代の日高平野の拠点集落である小松原Ⅱ遺跡や中世に日高・牟婁・有田で活躍した湯川氏館跡など、中紀を代表する遺跡が存在していることが知られています。

今回の発掘調査の結果、今から約2000年前の弥生時代中期の遺構や中世に活躍した湯川氏の館跡の濠などを明らかにすると共に、弥生時代の石包丁や中世の線刻瓦など数多くの遺物が出土し、この地域の歴史を解明するための多大な成果を得ることができました。

本書は、その成果をまとめた報告書ではありますが、当地方の歴史を知るうえでの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にあたり、御坊市教育委員会や御坊市遺跡調査会、県立御坊商工高等学校をはじめ、関係各位のご協力をいただき、ここに記して感謝の意とする次第です。

平成8年3月29日

(財)和歌山県文化財センター

理事長 仮谷 志 良

例 言

- 1 本書は、平成7年度に実施した県立御坊商工高等学校の格技場等建設に伴う小松原Ⅱ遺跡(湯川氏館跡)発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査及び整理業務は、県教育委員会より(財)和歌山県文化財センターが委託をうけて実施した。発掘調査は、平成8年・1996年2月1日～21日、整理は同期間実施し、本年3月29日に報告書の刊行に至った。
- 3 発掘調査、報告書作成に関して、県立御坊商工高等学校事務局楠山安生氏、県立和歌山工業高等学校教諭水島大二氏、御坊市教育委員会久貝 健氏、御坊市遺跡調査会中村政右衛門氏にご教示・ご協力を受けた。また、御坊市遺跡調査会川崎雅史氏、堺市埋蔵文化財センター森村健一氏には数多くのご教示を受けた。記して感謝する。
- 4 発掘調査及び本書の作成は、(財)和歌山県文化財センター主査渋谷高秀が担当した。
- 5 調査の組織は次の通りである。

調査委員

岡田 英男(和歌山県文化財審議委員会委員)
巽 三郎(和歌山県文化財審議委員会委員)
都出比呂志(和歌山県文化財審議委員会委員)
藤沢 一夫(和歌山県文化財審議委員会委員)

事務局

事務局長	中谷博明
次 長	菅原正明(平成7年12月1日より平成8年3月31日まで埋蔵文化財課長兼務)
埋蔵文化財課長	松田正昭(平成7年12月1日より平成8年3月31日まで兵庫県へ出向)
主 任	松下 彰
管理課長心得	西本悦子
主 事	松尾克人

本文目次

第1章 遺跡の位置と環境	1
第1節 日高平野の形成	2
第2節 小松原II遺跡周辺の弥生時代～古墳時代	3
第3節 湯川氏館跡	10
第2章 遺跡	14
第1節 調査にいたる経緯と経過	14
第2節 基本層序	16
第3節 遺構と遺物	19
1. 弥生時代	19
2. 室町時代	22
3. 近世～近代	24
第3章 まとめ	33
第1節 弥生時代中期	33
1. 小松原II遺跡環濠の復元	33
2. 小松原II遺跡の周辺と遺跡の性格	35
3. 和歌山県拠点集落の動向と日高平野弥生時代後期前半の様相	35
4. 複合鉢・水差し型壺の出土と遺構の性格	35
第2節 湯川氏館跡	36
1. 湯川氏館跡より前代の様相－鎌倉時代寺院跡の推定－	36
2. 湯川氏館跡の復元	36
第3節 近世の土坑について	38

挿図目次

第1図	御坊市位置図
第2図	縄文時代晩期海岸線（3000年前）
第3図	弥生時代海岸線（2000年前）
第4図	周辺の環境
第5図	和歌山県弥生時代遺跡図
第6図	日高川下流域弥生時代遺跡分布図
第7図	向山1号銅鐸と向山遺跡出土土器
第8図	亀山2号銅鐸と亀山遺跡出土土器
第9図	日高川下流域弥生遺跡一覧表
第10図	古墳時代遺跡図
第11図	湯川氏館跡と亀山城
第12図	湯川神社（紀伊統風土記より）
第13図	二重堀平面図
第14図	水島大二・小松原館跡位置図
第15図	遺跡周辺図
第16図	調査区位置図
第17図	土層模式図
第18図	遺構配置図
第19図	弥生時代遺構
第20図	弥生時代遺物実測図1
第21図	弥生時代遺物実測図1
第22図	堀出土遺物実測図
第23図	井戸平面・立面図
第24図	土坑23土層図
第25図	奈良時代須恵器、中近世陶磁器遺物実測図
第26図	中世瓦遺物実測図
第27図	小松原II遺跡環濠復元図
第28図	湯川氏館跡復元図

図版目次

巻頭図版	遺跡遠景
図版1 遺跡	遺跡全景 土坑24
図版2 遺跡	弥生時代遺構土坑24・溝25
図版3 遺跡	室町時代遺構井戸28
図版4 遺跡	室町時代・江戸時代遺構
図版5 遺跡	土層断面
図版6 遺物	溝25・出土遺物
図版7 遺物	土坑24・出土遺物
図版8 遺物	土坑24・堀24・出土遺物
図版9 遺物	奈良時代出土遺物
図版10 遺物	中世瓦

第1章 遺跡の位置と環境

日高郡は、紀伊半島のほぼ中央部に位置し、黒潮暖流の影響を受け温暖な気候である。和歌山県の紀北は古来より、畿内文化との交流が緊密である。一方、紀南地方は東海に近く、また熊野文化圏とも呼べる独自の文化を形成した地域でもある。この中間地域に日高郡は所在する。文化の形成にあたっては、紀北と紀南の中間地点に位置するという地理的位置に占める影響は、大きいものと考えられる。

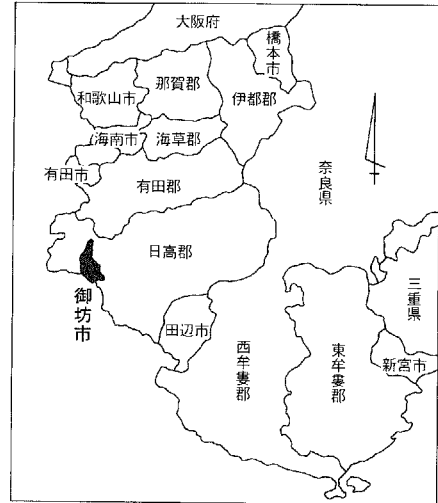
御坊市は、日高郡の中央部に位置し、日高川流域を含む日高平野を眼前に臨む地域に所在する。西には紀伊水道及び太平洋が広がり、四国徳島県を望む。北部や東部には険しい紀伊山地が存在し、豊かな日高川の水流と黒潮海流の流れと、自然環境は豊かで恵まれている。

御坊市が所在する日高平野は、和歌山平野について県内第二の沖積平野である。この日高平野の肥沃な農耕地域の生産力を背景として、また豊かな海の幸や山から産出する木材によって、日高の歴史は形成されてきた。

「御坊」の名の由来は、戦国時代、日高・牟婁・有田三郡で権勢をふるった亀山城主湯川直光の建立した吉原御坊に始まる。この吉原御坊が天正十三年の兵火で焼け、十年後の文祿四年(1585)に浄土真宗日高門徒が協力して現在の地に寺院を再建したのが日高御坊である。以来、門前町として発展してきた。地域住民の心の拠り所であり、精神的支柱である親らん上人の教え、浄土真宗本願寺派の寺院を「日高の御坊さま」「御坊所」と人々は呼び、尊崇し、いつしか地名も御坊になった。

今回発掘調査が予定されている御坊商工高校内の調査区は、小松原Ⅱ遺跡・湯川神社境内遺跡の二遺跡が重複する地点にあたる。両遺跡は、JR紀勢本線御坊駅南東、御坊市湯川町小松原に所在し、日高川によって形成された河口部北岸の標高5m前後の自然堤防上に位置する。両遺跡共に、十数次にわたる調査が実施され、遺跡の一端が把握されつつある。

小松原Ⅱ遺跡に近接して存在する小松原Ⅰ遺跡、蛭田坪遺跡、富安Ⅰ遺跡、津井切遺跡などは、地名によって遺跡が区別されているが、地形的に見ても一連の遺跡群と把握するのが適当である。また、これら遺跡の北方に位置する亀山の丘陵上には、高地性集落である亀山遺跡や銅鐸出土地



第1図 御坊市位置図

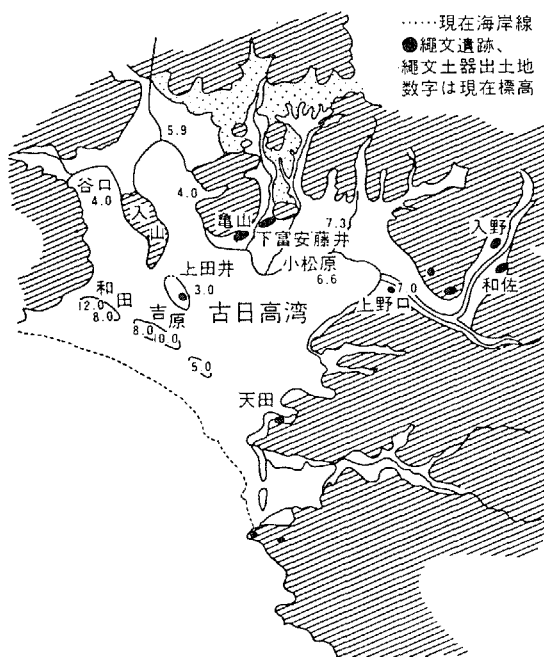
或いは群集墳の密集地でもあり、また中世亀山城が存在する。小松原Ⅱ遺跡では奈良時代の遺物も出土するところから、郡衙想定地にも該当する。小松原Ⅱ遺跡が所在する地域は、日高平野の最も中心的な場所であり、弥生時代から古墳時代にかけて、即ち地域に稲作が定着する時期から大和政権の支配が日高平野に及ぶ時期にかけての地域の歴史を構築する上で、また、それ以降の各時期においても、最重要地域と位置づけることができる。

第1節 日高平野の形成

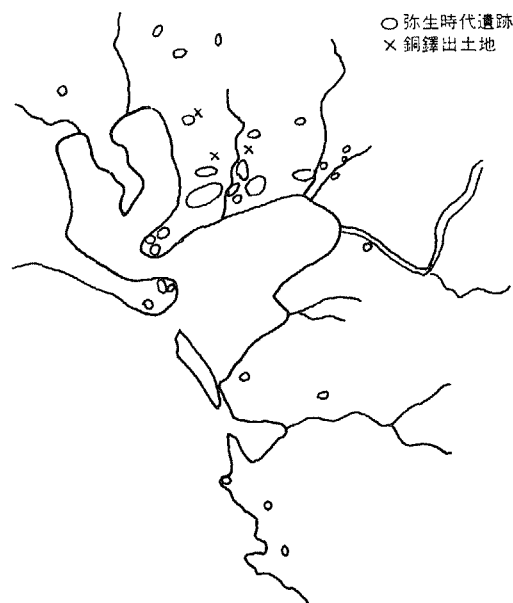
日高平野の成立過程については、「海に臨む海岸平野であり、日高川に運ばれた土砂が、浅い水域に堆積して形成された沖積平野である。日高平野の原形は、今から約二万年前のウルム氷河最盛期に形成され、その後の世界的な気候変化によって起こった、氷河性海水水準変化（氷河の成長や消失に伴って起こる、世界的な海面の昇降）により、あるときは内湾となり、潟湖となり、さらに日高川によって運ばれてきた土砂を堆積して、沖積平野になった。」とされる。

また、日高平野の生い立ちは、氷河性海水準変化によって、

- | | |
|----------------------|-------------|
| ①古日高平野期（約2万年前～1万年前） | 旧石器時代 |
| ②古日高平野湾期（約7千年前～4千年前） | 縄文時代 |
| ③日高潟湖期（約3千年前～2千年前） | 縄文時代～弥生時代中期 |
| ④日高平野期（約1600年前～現在） | 古墳時代前期～現在 |



第2図 縄文時代晚期海岸線(3000年前)



第3図 弥生時代海岸線(2000年前)

(御坊市史第1巻より抜すい)

四段階を経て現在のような土地に形成されたとされる。

現在の日高平野が形成されたのは、古墳時代前期段階になると想定されている。それ故、小松原Ⅱ遺跡や周辺に展開する遺跡群が活況を呈していた弥生時代には、日高潟湖期に該当し、現在見る御坊市の景観とは大きく違ったものと考えられる。日高平野が平野としての役割を果たすのは、古墳時代以降の時期と想定される。池本多万留氏によって、現在周知されている縄文時代と弥生時代の遺跡の所在地を地図に落とし、海岸線を軸とした旧地形が復元されている。旧石器時代以降の歴史に関しては、考古資料と地質の分野の相互協力が今後必要であろう。

第2節 小松原Ⅱ遺跡周辺の弥生時代～古墳時代

他の肉食獣と同じく永く採集生活をしてきた人類は、農耕と牧畜というより効果的な生産手段を獲得することによって、新たな地平にふみこんだといえる。自然に働きかけ、知恵と力によりそれを改編することによって新たな収穫物を創出するという一連の作業を経過する中で、それまでの自然な地球生態系から訣別し、一つには人工的な環境・景観を作りだし、一つには余剰生産物の再生産活動の一環である治水・灌漑工事に伴う強力な国家を生んだ。食料獲得の安定化という側面共に私的所有の概念、支配―被支配の概念を生み、当然の帰結である戦争をも生んだのである。新たな生産手段の獲得は、人類にとっては、一面パンドラの箱であった。

土地がもたらす豊かな木々の実りと海川がもたらす魚貝類に依拠し、経験豊富なりーダーに率いられた階級のない社会、霊と物体の二つの世界観を信じた人々が生き、エネルギーに満ち、爆発的な力を秘めた縄文社会を経験してからのち、日本社会は中国南部や朝鮮半島から農耕という新たな生産手段を受け入れた。水稻耕作を軸とする農耕社会の成立は、安定し生産量を想定できる収穫物・米を生み出し、産業革命に匹敵する人口の増大をうみだすと同時にまた、他の農耕社会と同じく階級社会や国家をうみだし、結果として環境破壊や戦争を招来した。

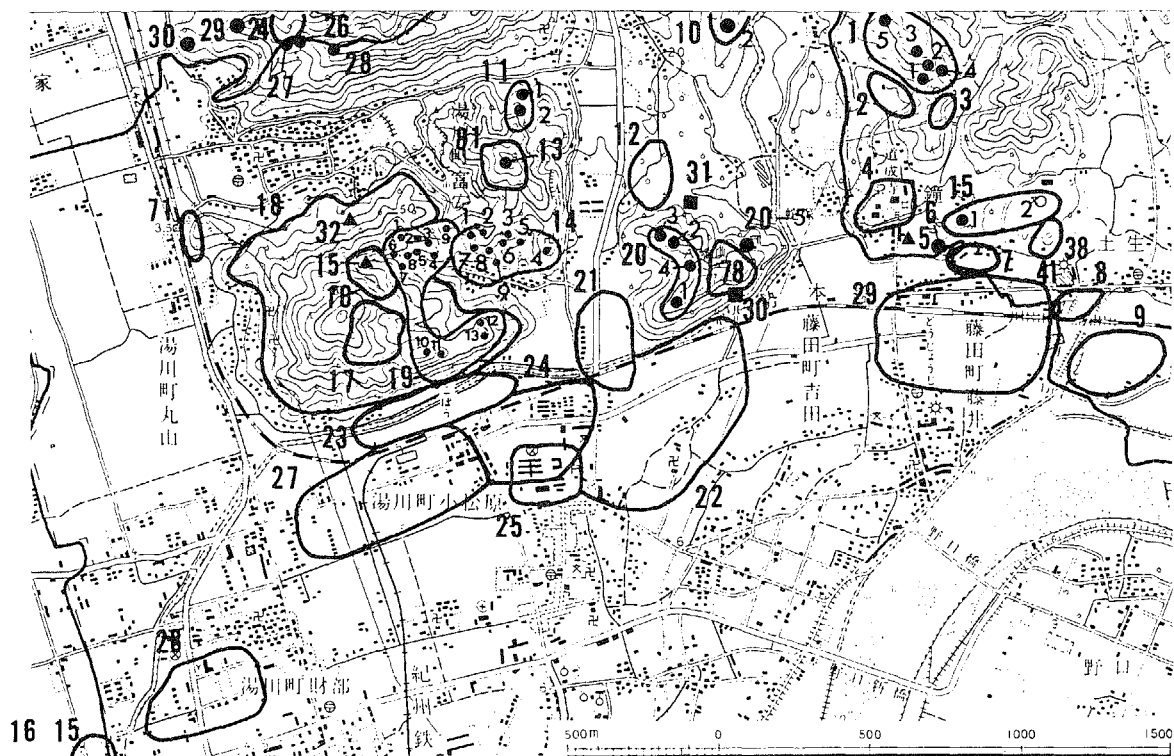
和歌山県の弥生時代に関しては、集落論や土器論、銅鐸論等多くの論文が蓄積されている。近時は、前田敬彦氏による論文「紀伊における弥生時代集落と銅鐸」が提示された。氏の論文は、中期Ⅳ様式からⅤ様式にかけての編年案を提示したうえで、県下の集落の動向を検討した。紀伊の各水系単位に存在する弥生集落、可耕地を眼前に臨む微高地上に位置する各拠点集落の動向とその消長を前後する高地性集落の成立と廃絶を相互に検討し、各水系の共通性と違いを把握し、そのことの上に、銅鐸祭祀が当然ながら弥生社会の産物であるとの認識のもと、集落の大きな変動期・断絶の時期に、銅鐸の埋納時期を推定する方法を提示した。また、畿内に比較して遺跡がより単純で純粋な動向を示すため、抽象論にのめりこみやすい銅鐸祭祀の在り方、効力を消失して埋納されるその時期を、和歌山県の弥生集落の動向に定点を定めて推定した（事実埋納時期に関しては的確であろう）事により、畿内や日本の弥生時代の研究に与える影響は大きいである

う。

土井孝之氏は「紀伊—二形態の弥生集落」において、紀伊の弥生集落の動態と内容に分析を加え、「岡村遺跡は縄文社会に弥生人が入り込んだ集落、太田黒田遺跡は新たに伝播定着した弥生人社会の集落と考え、弥生集落の成育に二形態存在する」など多くの示唆に富む指摘をおこなった。

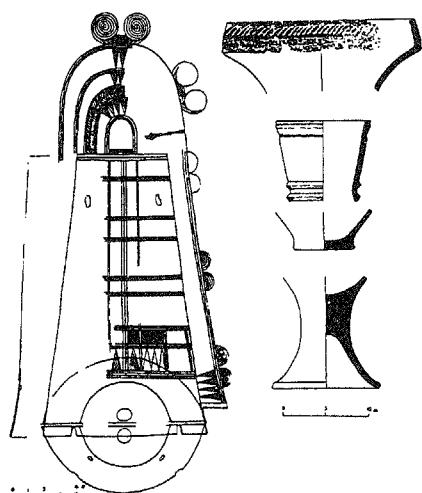
日高平野に展開する弥生集落は、環濠と想定される弥生時代前期の溝が検出された小松原Ⅱ遺跡を中心に近接して存在する遺跡群が拠点集落と考えられる。遺跡群からは、弥生時代中期の竪穴住居址・溝・土坑・甕棺などが検出され、弥生時代前期から中期にかけての数百年間の生活の痕跡が見つかっている。他に大規模な集落としては、津井切遺跡東方の日高川に近接して所在する東郷遺跡がある。標高8m前後の低丘陵上に位置し、中期から後期、古墳時代前期にかけて存在する遺跡である。当遺跡は、良好な弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての土器が出土したことで知られる。

他水系の弥生時代拠点集落の動向と同じく、弥生時代中期末には低地の集落立地を放棄し、南に位置する山地、亀山に集落は移動する。亀山遺跡では、弥生時代中期末から後期前半段階の資料がある。紀ノ川水系に所在する橘谷遺跡など和歌山県の高地性集落と同時期である。しかし、日高平野では高地性集落を放棄する時期、即ち低地の集落が再び活性化する時期を見ると、他の水系に比較してやや特異な展開を見せる。弥生時代後期の低地集落で最も古い資料は、東郷遺跡

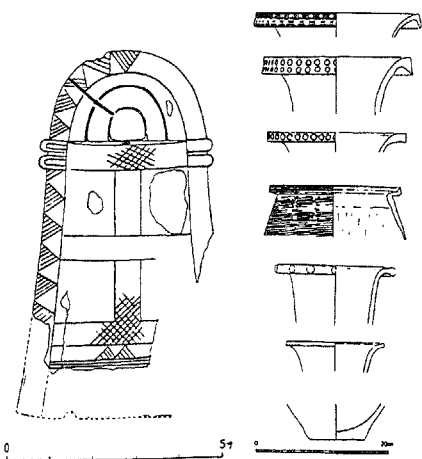


第4図 周辺の環境

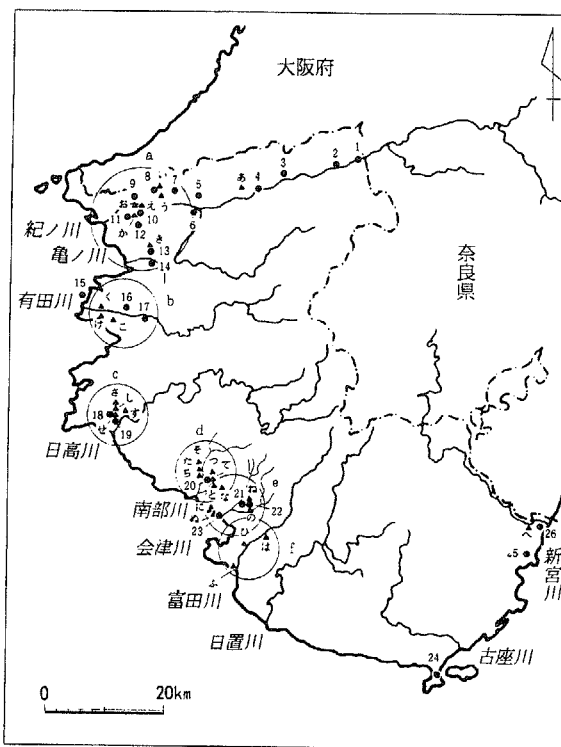
- | | | | |
|-------------|------------|--------------|-----------|
| 14. 亀山古墳群 | 18. 亀山城跡 | 22. 津井切遺跡 | 27. 経田坪遺跡 |
| 15. 亀山銅鐸出土地 | 19. 亀山古墳部 | 23. 小松原Ⅰ遺跡 | 28. 堅田遺跡 |
| 16. 期日谷遺跡 | 20. 八幡山古墳部 | 24. 小松原Ⅱ遺跡 | 29. 東郷遺跡 |
| 17. 亀山遺跡 | 21. 富安工遺跡 | 25. 湯川神社境内遺跡 | 71. 亀山西遺跡 |



第7図 向山(荊木)1郷銅鐸と
向山遺跡出土土器



第8図 龜山(朝日谷)2号銅鐸と
龜山遺跡出土土器



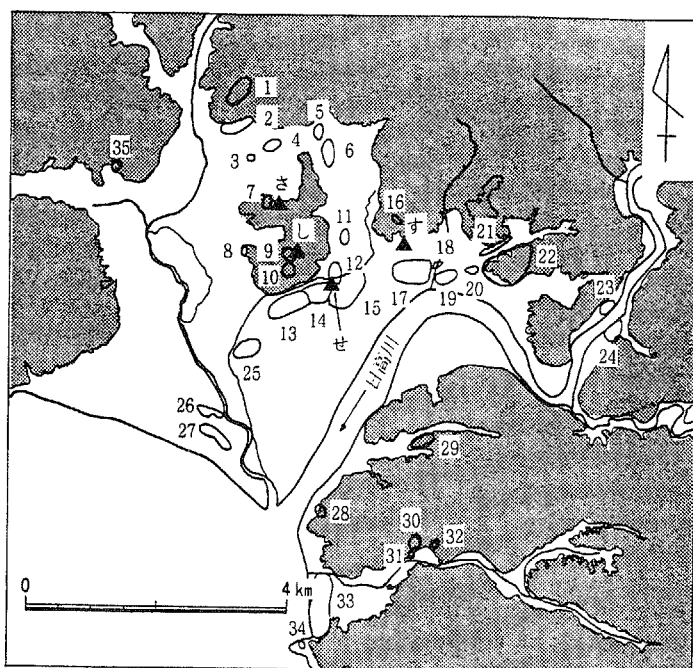
第5図 和歌山県弥生時代遺跡図

〈主要遺跡〉

1. 血繩遺跡
2. 市脇遺跡
3. 佐野遺跡
4. 船岡山遺跡
5. 岡田遺跡
6. 船戸遺跡
7. 吉田遺跡
8. 橋谷遺跡
9. 六十谷遺跡
10. 鳴神地区遺跡
11. 太田・黒田遺跡
12. 井辺遺跡
13. 滝ヶ峯遺跡
14. 亀川遺跡
15. 地ノ島遺跡
16. 宮原奥の谷遺跡
17. 田殿・尾中遺跡
18. 龜山遺跡
19. 小松原II遺跡
20. 小野月向遺跡
21. 八丁田遺跡
22. 岩倉山遺跡
23. 古目良遺跡
24. 笠嶋遺跡
25. 佐野遺跡
26. 阿須賀神社遺跡

〈銅鐸出土地〉

- | | |
|--------------|----------------|
| あ 粉河寺銅鐸 | た 雨乞山銅鐸 |
| い 橋谷銅鐸 | ち 大久保山銅鐸 |
| う 宇田森銅鐸 | つ 久地峠銅鐸 |
| え 砂山(田井ノ瀬)銅鐸 | て 常楽銅鐸 |
| お 有本銅鐸 | と 下の尾銅鐸 |
| か 太田・黒田銅鐸 | な 林(平ヶ峯、ヒロサ)銅鐸 |
| き 吉里銅鐸 | に 芳養松原(矢田ヶ谷)銅鐸 |
| く 大峯(新堂)銅鐸 | ぬ 中ノ谷銅鐸 |
| け 山地(上ノ段)銅鐸 | ね 山田代銅鐸 |
| こ 野井(千田)銅鐸 | の 岩倉山(矢田ヶ谷)銅鐸 |
| さ 向山(荊木)銅鐸 | は 田熊銅鐸 |
| し 龜山(朝日谷)銅鐸 | ひ 朝来(岩崎)銅鐸 |
| す 鐘巻(道成寺)銅鐸 | ふ 中銅鐸 |
| せ 小松原朝日銅鐸 | へ 神倉山銅鐸 |
| そ 玉谷銅鐸 | |



第6図 日高川下流域の弥生時代遺跡分布図
(第5図～第8図前田敬彦論文より抜粋)

〈遺跡名〉

- | | |
|-----------|-----------|
| 1. 萩原 | 19. 法徳寺 |
| 2. 萩原II | 20. 小熊 |
| 3. 荊木 | 21. 小熊II |
| 4. 別所 | 22. 木曾 |
| 5. 上富安II | 23. 入野 |
| 6. 富安III | 24. 和佐A |
| 7. 向山 | 25. 堅田 |
| 8. 龜山西 | 26. 堂の前西沼 |
| 9. 朝日谷 | 27. 吉原 |
| 10. 龜山 | 28. 正文字山 |
| 11. 富安岡 | 29. 熊野神社 |
| 12. 富安I | 30. 中村II |
| 13. 姪田坪 | 31. 中村 |
| 14. 小松原II | 32. 猪野々 |
| 15. 津井切 | 33. 東大人 |
| 16. 箱谷 | 34. 尾ノ崎 |
| 17. 東郷 | 35. 小中 |
| 18. 土生B | |

〈銅鐸出土地〉

- | | |
|-------|---------|
| さ 向山 | す 鐘巻 |
| (荊木) | (道成寺) |
| し 龜山 | (位置推定) |
| (朝日谷) | せ 小松原朝日 |
| | (位置推定) |

番号	遺跡名	所在地	I	II	IV			V					立地	標高 (m)	比高 (m)	備考
					1	2	3	1	2	3	4	5				
25	堅田	御坊市湯川町財部	・		○								沖積平野	2~3		集落(住居)
28	正文字山	塩屋町北塩屋	○										丘陵	5~25		散布地
34	尾ノ崎	塩屋町南塩屋	○		○	○						○	海岸段丘	9~15		集落(住居, 方形周溝墓), 製塩
13	蛭田坪	湯川町財部, 小松原			○	○							・ 沖積平野	4~5		集落?(溝)
14	小松原II	湯川町小松原	○	○	○	○						○	沖積平野	4~5		集落(住居, 環濠)
12	富安I	湯川町富安				○						○	沖積平野	5~6		集落(住居, 方形周溝墓)
17	東郷	藤田町藤井			○	○	・	○	・	・	・	○	沖積平野	7~9		集落(環濠?)
29	熊野神社	岩内										・	○ 低丘陵	18	12	集落
30	中村II	塩屋町北塩屋	○									○	○ 低丘陵	15~25		集落(住居)
10	龜山	湯川町丸山					○	○					丘陵	60~110	55~105	高地性集落(散布地)
7	向山	日高郡日高町荊木			○								丘陵斜面	30~70	15~55	高地性集落(散布地)
27	吉原	美浜町吉原		○	○	○	・					○	海岸砂丘	8~9		墓

銅鐸出土地

記号	遺 跡 名	所 在 地	外 縁		突 線					高 さ (cm)	文 様	立 地	推定標高 (m)	推定比高 (m)	備 考
			1	2	1	2	3	4	5						
せ	小松原朝日銅鐸	御坊市湯川町小松原	○							現高21	2区袈裟	沖積平野	4~5		鈕の大部分を欠く。
し	龜山(朝日谷)銅鐸1	湯川町丸山		○						現高20	4区袈裟	丘	70	65	鈕の大部分を欠く。
し	龜山(朝日谷)銅鐸2	湯川町丸山		○						現高16.1	4区袈裟	丘陵	70	65	鈕の残存。
し	龜山(朝日谷)銅鐸3	湯川町丸山		○						現高15.5	4区袈裟	丘陵	70	65	鈕の大部分を欠く。
さ	向山(荊木)銅鐸1	日高郡日高町荊木					○			82.5	6区袈裟	丘陵	50	35	
さ	向山(荊木)銅鐸2	日高町荊木					○			推定86.3	6区袈裟	丘陵	50	35	
す	鎌巻(道成寺)銅鐸								○	116	6区袈裟	沖積平野	7~8		

第9図 日高川下流域弥生遺跡一覧表(前田論文より抜粋)

溝2資料が存在する。東郷遺跡は、後期前半段階に該当する遺構・遺物が検出される。東郷遺跡の存在は、県下において弥生時代後期に低地に立地する最も古い例に該当する。遺跡の立地など日高の重要拠点として、また低丘陵に立地した事により、その標高故に、後期前半段階でも存続できたのだろうか。日高平野では、弥生時代後期後半から末、庄内期にかけては、他水系の動向と同じく再び低地に集落を戻している。

当該期の日高平野の様相を知るに東郷遺跡の存在がある。当遺跡の古墳時代前期溝4・溝25は、周辺地域を潤した灌漑用水路と想定され、出土遺物には中部瀬戸内地方、北九州地方、尾張地方、河内地方などの搬入土器が含まれている。日高平野のすぐ北に位置する有田川水系の拠点集落田殿・尾中遺跡の庄内期の様相は、東郷遺跡でみる搬入土器の大量出土の状況とは対極に位置し、在地産の土器のみで占められる。日高と有田の位置関係の違いからか様相は極端に相違する。他地域の土器の出土が交流関係を示唆するものであるならば、庄内期の日高川水系は、搬入土器が確かにその地方の物であるとの前提にたてば、北九州や中部瀬戸内、或いは尾張地方などと活発に交流していたことになる。また韓式系土器も出土し、久貝健氏は「東郷地域の開発に際して、朝鮮半島からの渡来人が技術面などで関与していた」と想定し、遺跡の性格を「大和政権から日高地方の山間と平野部を結ぶ交通の要所として重要視され、人員・物資の援助を受け」ていたとし、これは韓式系土器や各地の搬入土器の存在が示していると担当者は考えている。

御坊周辺の銅鐸は、4遺跡で7口出土している。遺跡の動向と銅鐸埋納に関して前田氏は「外縁付紐1式の小松原朝日銅鐸が沖積平野に埋納されたのが、中期後半の中ごろ(Ⅳ-2段階)ま

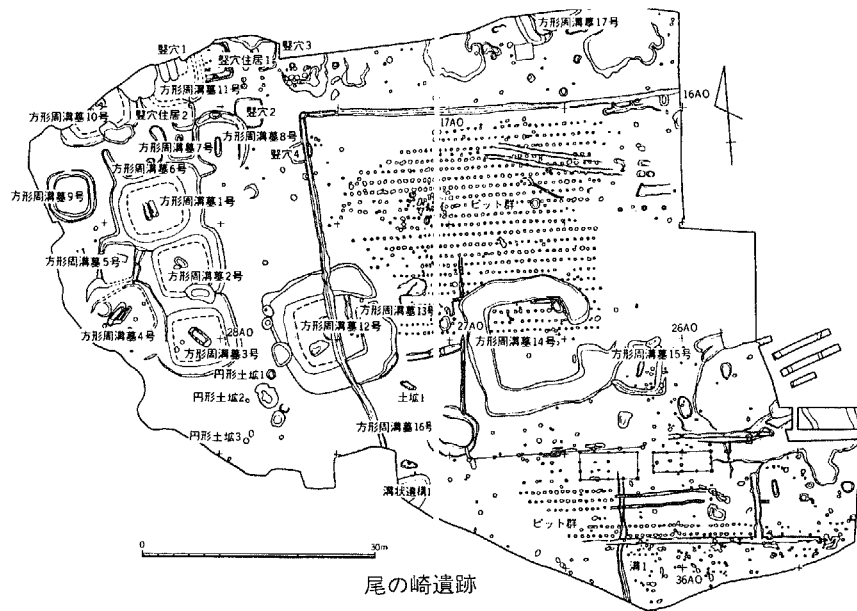
での事であり、扁平紐式4区袈裟襷文の新しいタイプである亀山（朝日谷）銅鐸が埋納されたのは中期末（Ⅳ－3段階）から後期前半（Ⅴ－1かⅤ－2段階）とみられる。突線紐3式銅鐸である向山銅鐸を埋納した集落は不明であるが、突線紐5式銅鐸が平野部から出土する点よりみて、鐘巻（道成寺）銅鐸が埋納されるのは、Ⅴ－2段階以降、あるいは東郷遺跡がやや特異な展開をしていることも考慮するならⅤ－5段階以降の可能性」を指摘している。

弥生時代後期末～古墳時代前期段階、布留式土器出現期までは、和歌山県の土器資料は、地域色豊かな特異な展開を見せる。既に有田川水系の野田地区遺跡の報告書で展開したように、庄内期を前後する時期には、高杯や甕に典型的に表現されるように、高杯脚柱部の粘土紐巻き上げによる中脹らみ状況、エンタシスを呈する器形や裾部に穿たれた穴の大きさ（小指がすっぽりと入る大きさ）、また底部球形の弥生甕に見る伝統の強さなど紀ノ川水系を除く他水系の独特な様相が判明する。それら土器の様相は、その最北限を有田川水系に持つが、日高川水系は、和歌山県の間地点に位置するため、その様相はより鮮明であると想定できる。しかし、搬入土器の多さは、他地域との活発な交流を示唆するため、一面和歌山県内の位置関係からは推定できない面も存在するかもしれない。今後、土器の持つ地域性の問題は、課題として認識する必要があるだろう。とりわけ、庄内期から古墳時代前期の土器様相は、弥生土器から布留式土器に変化する段階においての移行の仕方の違いや同一点の検討、さらには地域を拡げて泉州南部や伊勢湾地方との比較検討作業を通じて、在地での地域色が最も投影しやすく、そのことの意味が、多方面に展開できる素材として必要であり、重要である。

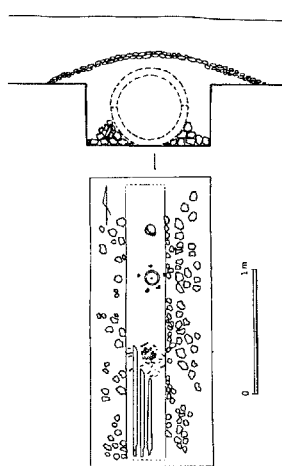
紀ノ川水系に古墳が出現するのは布留式古相期であるとされており、日高川水系の古墳の出現は、時期的に遅れる。紀ノ川水系の南、日高川水系の北に位置する有田川水系では、古墳の存在は明確でないが、内行花文鏡が出土しており、前期古墳の存在が想定できる。また、紀ノ川水系では三角縁神獣鏡の存在が知られている。紀北地方に位置する両水系ともに彷彿製鏡ではなく、中国鏡が出土する。日高平野では中国鏡の出土例はなく、彷彿製鏡のみが出土している。日高川水系より以南の南部川水系、会津川水系、富田川水系でも同様の現象を呈し、中国鏡の出土例はない。

日高郡における古墳時代前期の遺跡は、御坊市尾の崎遺跡の方形周溝墓群、岩内3号墳、阪東丘古墳群が存在する。尾の崎遺跡の方形周溝墓群と岩内3号墳は、ほぼ同時期の4世紀後半から5世紀前半代に存在する。日高平野には、古墳時代前期のほぼ同時期に二系統の墓が存在するのである。一方は独立した一基の円墳である岩内3号墳であり、他は群として存在し、弥生時代以降の伝統的な墓制である方形周溝墓群で、最終前方後方墳を呈する尾の崎遺跡方形周溝墓である。共に大和政権より配布されたと推定される鏡・刀・玉を共通して持つ。

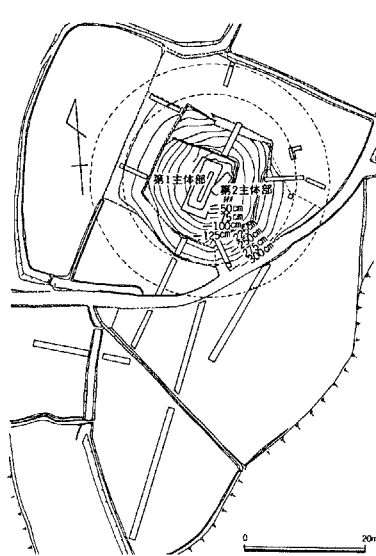
尾の崎遺跡の方形周溝墓群は18基存在する。一基を除き、尾根筋に沿って造営されている。久貝健氏は周溝墓の位置関係から、A B二群に区分し、更にA群をその立地・並び方によって9小



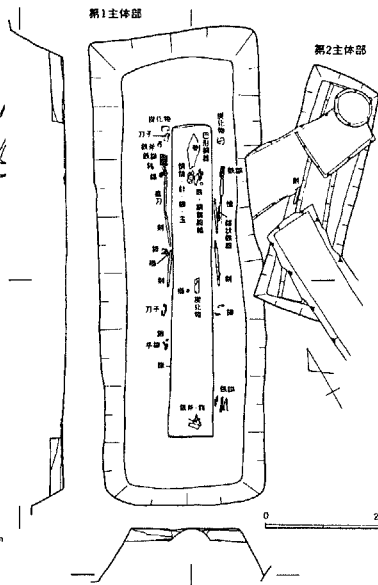
尾の崎遺跡



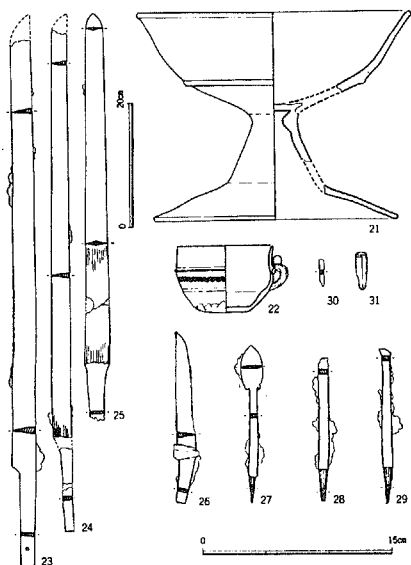
阪東丘2号墳
主体部



岩内3号墳



那智勝浦町下里古墳



阪東丘2号墳出土遺物

第10図 古墳時代遺跡図(御坊市史考古資料編より抜粋)

群に分けた。そして周溝の共有関係・陸橋部の有無・副葬品から造営主体を想定した。久貝健氏の論の問題点は最初にある。A群の9小群の区分の仕方である。詳細に検討した結果の判断と考えられるが、このとらえ方には根本的な問題が含まれている。客観的にみて、だれが考えても9小群と考えられるだろうか。例えば、8群と把握された13・15号墳の存在である。これらは周溝を利用して形成されている点やその規模・位置から、12号墳－13号墳・14－15号墳の関係性をもって存在しているように見えるが、久貝健氏はそうは考えない。また、群の把握が詳細すぎると考えられる。論の出発点にもあたる群構成に問題があれば、その後展開される論は、当然ながら成立しない。尾の崎遺跡調査担当者の一員として、以下のように私は推論する。

尾の崎遺跡方形周溝墓群は、岬に突き出た尾の崎丘陵の中央部を走る尾根筋にそって造営される。また北から南に向って、1号墳－2号墳－3号墳が造営され、3号墳からは西から東に向って12号墳（13号墳）－14号墳（15号墳）が造営される。この丘陵尾根筋にそってつぎつぎに造営される被葬者群が、造営の主体者と考えられる。これら方形周溝墓群は、溝を共有した一群（1～11号墳、9号墳は溝は共有しないが近くに存在する）と溝を共有しない一群（12号墳・14号墳）に区分される。尾根筋にそって北から南に向って、主軸線と考えられる線にそって造営される方形周溝墓は、1～3号墳までは小規模で、周溝を共有し主体部を一墳丘に二つも持つものも存在するように、弥生時代の伝統的墓制を色濃く投影させながら家族墓としての性格から脱皮できていない。しかし、西から東に向って造営される段階、3号墳－12号墳から14号墳段階には、とりわけ周溝を2号墳と共有した3号墳から、周溝を切り離し、独立した方形墳となる12号墳の段階がこれまでの家族墓として営まれていた地平から大きく離脱し、いわば古墳と呼べる段階に到達した時期と把握できよう。3号墳には、彷彿鏡が存在する。彷彿鏡を与えられた時期から、少し時期を置いてから、墳丘が独立したのである。この後、造営される14号墳は、前方後方形を呈した墳形を持ち、周溝を共有した15号墳からは、彷彿鏡が出土する。

尾の崎遺跡が事実として示す重要な点は二点ある。一つは小規模・低墳丘・周溝の共有・主体部の統一されないバラエティさなど、弥生時代の伝統的な墓制が銅鐸祭祀が終了した後の古墳時代になっても、日高川水系の支配階層には営まれるという事実である。更にこれら方形周溝墓の被葬者が鏡・彷彿鏡を手に入れたあとは、独立した古墳の被葬者、それも方形墳や前方後方形という大和政権が死の世界の支配までも視野に含めて制度として定めた墓制を受け入れ、組み込まれていく事実である。この二点の視点にも限りなく多くの論点が含まれる。尾の崎遺跡は、方形周溝墓から古墳への展開過程が一遺跡内で明確に示され、判明することでも重要なのである。

尾の崎遺跡群は、祖先・前代からの墓を眼前に臨み、方形周溝墓を造営できる集団が、一方の溝を先代の溝と共有して墓を造ったのである。強く先祖の血を感じることができる。家族墓である。死を契機にして造営された方形周溝墓の前では、自らの集団の祖先の墓を見ながら、儀式

が執り行なわれたのであろう。しかし、3号墳-12号墳への移行期、彷彿鏡を大和政権から与えられた時期を境として、古墳の被葬者としてその姿を変えるのである。

岩内3号墳は、円墳で周辺には同時期の古墳や前代に遡るような墓制は一切存在せず、忽然と出現し、独立して造営される。墳形は円墳で、直径28mを測り、幅5mの溝が巡り、盛土は2.4mの高さである。主体部には、割竹形木棺を直葬し、内部には彷彿鏡・剣・玉類や巴形銅器の他、武器類・工具類・木工具類など多様な遺物が出土した。墳形といい、主体部の型式、副葬品の内容といい、まさに古墳である。地域社会の支配者として、民衆とは隔絶して存在し、大和政権との緊密で強いつながりを示す。日高平野に、古墳時代前期に存在する二系統の墓制が誕生するその時期、大和政権は政治権力として各地で争闘戦を繰り返しながら、全国制覇を狙った。鏡・剣・玉の三種の神器を副葬品として、また弥生時代の墓制を利用しつつも、新たな前方後円墳・前方後方墳などの墳形を創造し、全国の地域色が豊かで伝統的な慣習が残存しやすい墓制を、この墳形と副葬品で統一したのである。政権が狙う全国制覇の戦略拠点の地域支配者に対して、独特の墳形と副葬品の持つ呪術や権威としての象徴を与えることで、或いは強いることで、「大和」の支配-非支配の一環に組み込まれる関係を造り出したのである。まさに尾の崎遺跡の方形周溝墓群1～3号墳に代表される在地の支配者層の姿・方形周溝墓群が、3号墳から12号墳古墳へと、方形の古墳へと転化する時期、また岩内3号墳が出現する時期が、日高平野における大和政権との強固な関係性が構築された時期なのである。この4世紀後半から5世紀前半段階は、文献にみるように大和政権の朝鮮出兵など国際関係が緊張する時期でもある。

第3節 湯川氏館跡

水島大二氏によると御坊市の中世城郭は、16箇所存在する。その内、規模や残りのよさで群を抜くのは、「亀山城」であろう。日高平野を一望する標高120mの頂上付近に立地する亀山城主は、湯川氏の三代目弥太郎光春だと言われるが定かでない。山全体に曲輪が配置され一大城郭である亀山城は、本丸跡には、土塁がほぼ完全な形で残存する。この亀山城主湯川氏の平地の館跡が、小松原館跡である。

湯川氏は、甲斐武田の一族を祖とし、忠長が甲斐国（山梨県）より道ノ湯川（現西牟婁郡中辺路町湯川）に住み、この地で山賊を討った事が京都探題に認められ、恩賞として牟婁芳養荘の統治が許されたという。三代目光春は、在地領主との戦闘を勝抜き、日高への進出を果たし、亀山に城を築いて本城とした。さらに、その子らは有田地方に進出し、牟婁・日高・有田三郡の支配権を確立し、事実上の守護とまで言われるようになった。湯川11代、直光の時代、天文18年(1549)に平地に住居を構えたとされ、それが小松原館跡・湯川氏館跡とされる。

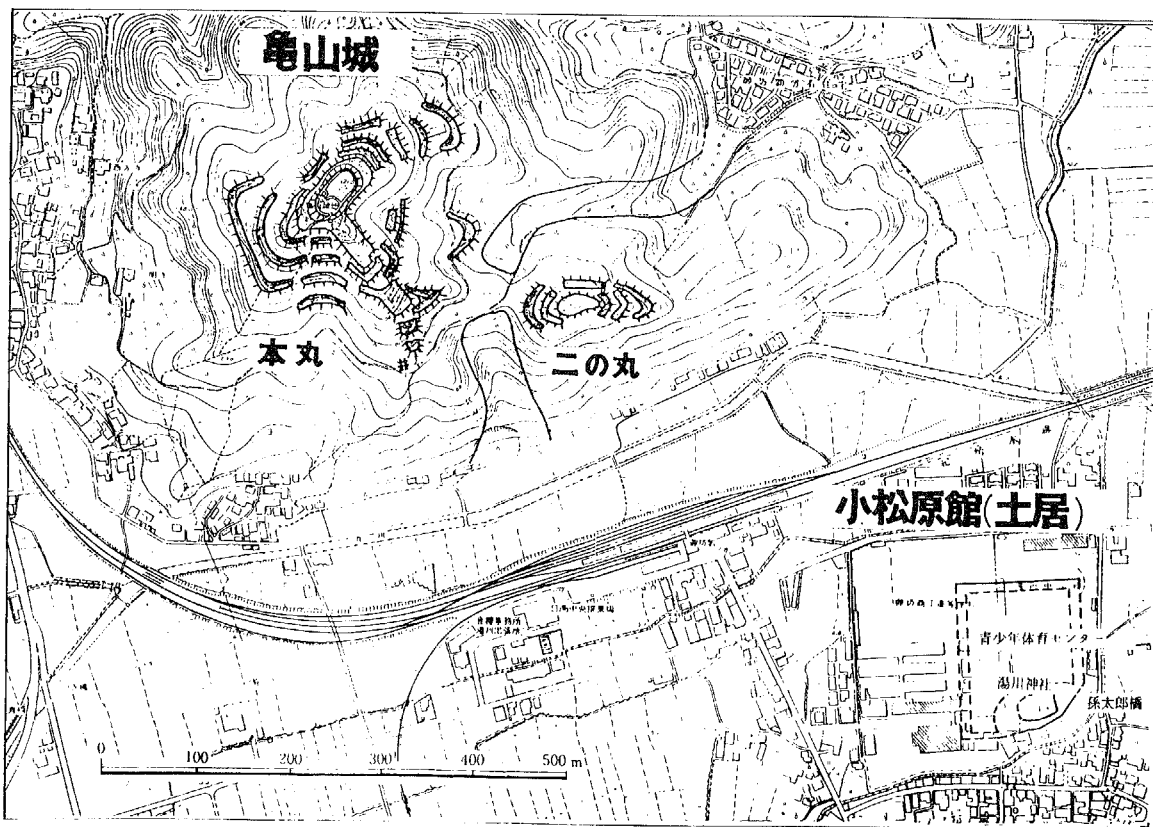
湯川神社境内に存在する湯川氏館跡は、土居の子字が湯川神社周辺に残り、現在も神社周辺を

めぐる池が、堀の一部ではないかと想定され、湯川神社、県立御坊商工高校や湯川中学校敷地内に、「館跡」の存在が推定されていた。

湯川氏館跡の調査は、県教育委員会や社団法人和歌山県文化財研究会や御坊市遺跡調査会によって、既に十次にわたって調査された。考古資料の蓄積は、文献資料とは違った側面を明確にすると同時にまた数多くの問題点も提起する。昭和55年度の湯川中学校校舎改築に伴う調査、昭和56年度以降の県立御坊商工高校の校舎改築に伴う調査などによって、室町時代の館の堀・土塁・池・溝・井戸などが検出され、館の規模が当初予想していたより西側に広がり、南北200m、東西250m以上を有する事が明らかとなってきた。

堀跡は、北堀・西堀（内堀、外堀）・南堀で確認されている。西側の堀は、二重に掘削され、内堀、外堀構造になっている。内堀は、幅13.5m以上・深さ2.7mの規模、外堀は、幅6～7m・深さ2.5mの規模を持つ。内堀と外堀の間には、高さ1m以上の土塁が築かれていた。堀－土塁－堀の本格的な二重構造は、中世山城によく見られるもので、「外－内・敵－味方」の思想を顕著に構造物・館・城で表現したものである。

北側の堀は、幅6～11m以上である。西堀は、複雑な方向を示し、東西に走る堀や南北に走る堀など検出され、入口などが有った場所と想定されている。東堀は、未調査のため推定しかできないが、湯川神社の池がめぐり、これが堀跡と一致するものと考えられる。館の中心部分は、昭和

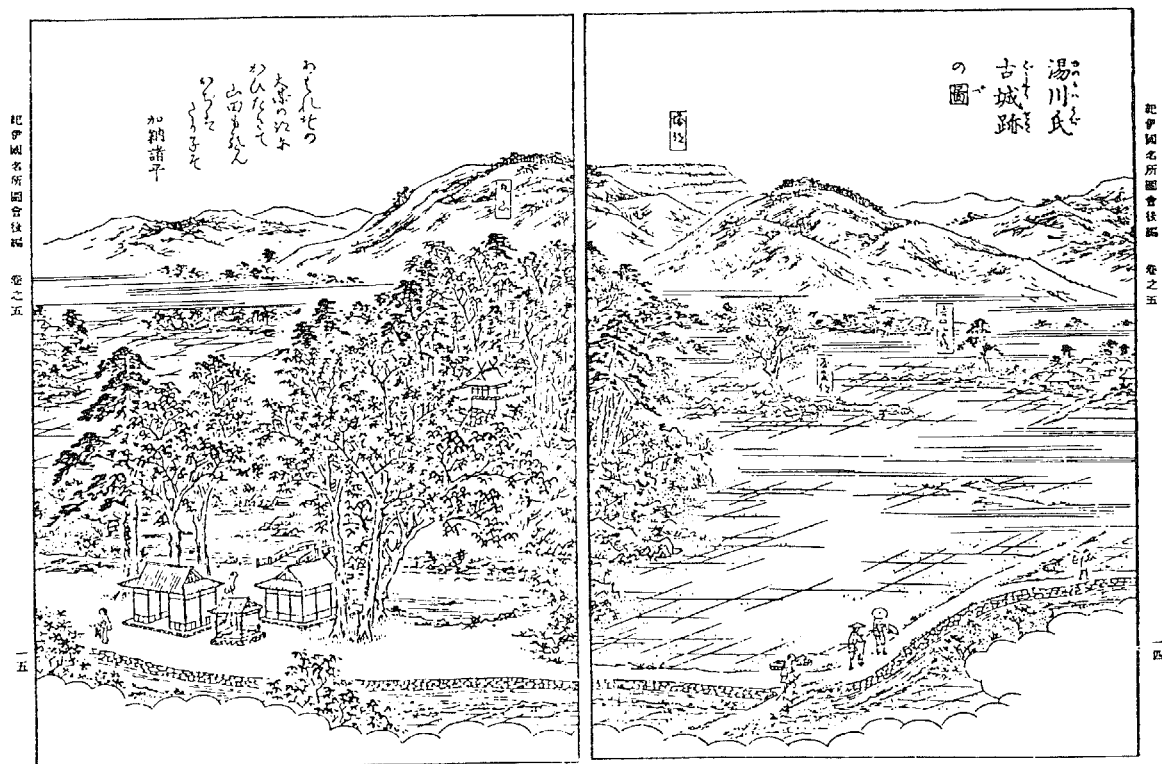


第11図 湯川氏館跡と亀山城 久貝健「小松原II遺跡(湯川氏館跡)発掘調査概報」より抜粋

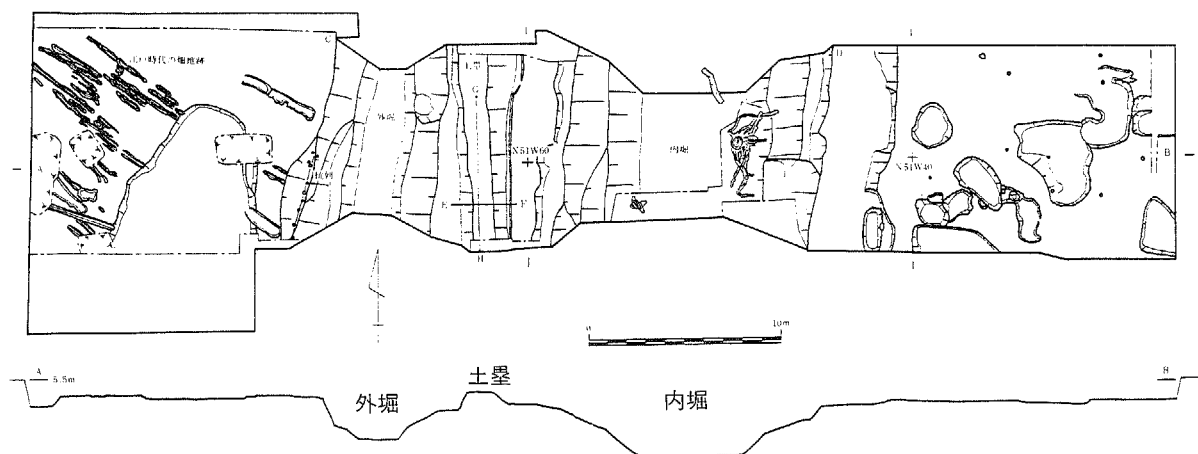
58年度Ⅰ・Ⅱ区、昭和61年度Ⅰ・Ⅲ区に集中して見られた土坑群からは、廃棄された大量の瓦類が出土し、また井戸跡など水利施設を検出した。今回の調査区周辺が、館の中心部分に該当すると想定できる。

文献による館の成立は、16世紀中葉段階であるが、遡る資料が数多く検出されており、三代光春が築城した亀山城の成立の時期、14世紀中葉を前後する頃には、既に何らかの館跡が構築されていた可能性も出て来ている。

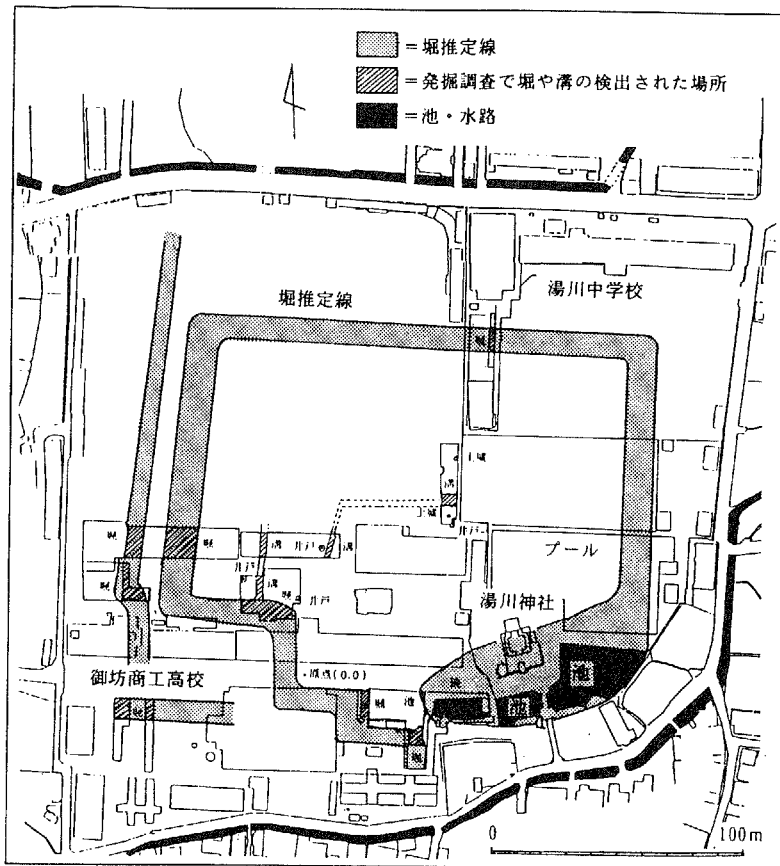
また、「文永五年（1268年）銘」と墨書された扇子が、溝状の落ち込みから出土している。共伴



第12図 湯川神社 紀伊統風土記より



第13図 二重堀 久貝健「御坊市遺跡調査会概報」より抜粋



第14図 水島大二「小松原館跡位置図」『和歌山県の城』より抜粋

遺物は、土器・木器がある。
土器は、瓦器碗・皿、土師器大皿・小皿、羽釜・青磁碗・白磁合子、常滑甕がある。木器は、南無弥阿陀仏と六字名号が墨書された笹塔婆や位牌、人形など仏教道具が出土した。仏教に関する木器の出土は、有田郡吉備町の野田地区遺跡溝2出土遺物にあり、出土した遺物の内容もほぼ同じである。県内では、紀年銘をもつ木器の出土は初めてであり、共伴した遺物の実年代が判明する資料という点でも、この遺物群の持つ意義は大きい。

参考文献

- 三坂広介「歴史時代における日高川下流域平野の発達」『立命館史学320』1972年
- 池本多万留「第1編自然 第二章地形 第2節日高平野」『御坊市史第1巻 通史編』昭和56年
- 土井孝之「紀伊地域」『弥生土器の様式と編年』1989年6月
- 土井孝之「紀伊一二形態の弥生集落」『弥生文化の成立』角川書店1995年9月
- 前田敬彦「紀伊における弥生時代集落と銅鐸」『古代文化』第47巻第10号 1995年6月
- 巽三郎・久貝健・西岡巖編『御坊市史第3巻 資料編』
- 巽三郎・久貝健他『尾の崎遺跡発掘調査報告書』昭和56年3月31日
- 久貝健『東郷遺跡』御坊市遺跡調査会 1987年3月
- 土井孝之「湯川氏館跡」『和歌山地方史研究25・26』1994年3月
- 土井孝之『県立御坊商工高等学校埋蔵文化財発掘調査概報』1987年3月
- 久貝健他『湯川神社境内遺跡（湯川氏館跡）発掘概報』御坊市遺跡調査会 1981～1991年
- 久貝健『小松原II遺跡（湯川氏館跡）発掘調査概報Ⅶ』1991年3月
- 水島大二監修『定本・和歌山県の城』郷土出版社 1995年7月
- 水島大二「第10編文化財 第3章城郭」『御坊市史』昭和56年

第2章 遺 跡

第1節 調査に至る経緯と経過

1、調査に至る経緯

県立御坊商工高校には、小松原Ⅱ遺跡や湯川氏館跡が存在し、校舎の増改築に伴って、埋蔵文化財の調査が、御坊市遺跡調査会・県文化財課・社団法人和歌山県文化財研究会等の各組織によって実施され、弥生時代の小松原Ⅱ遺跡や湯川氏の館跡に関する資料が蓄積されている。今回の調査は、県教育委員会総務課が御坊商工高校内に格技場等を新設することになり、埋蔵文化財の取り扱いについて総務課と文化財課が協議した結果、発掘調査をすることになった。調査は、県教育委員会総務課が、(財)和歌山県文化財センターに委託して、実施することになった。平成7年12月には旧校舎の解体に伴って基礎コンクリートが撤去されることになり、立ち合い調査を実施し、本格的な発掘調査は、平成8年2月1日からおこなった。

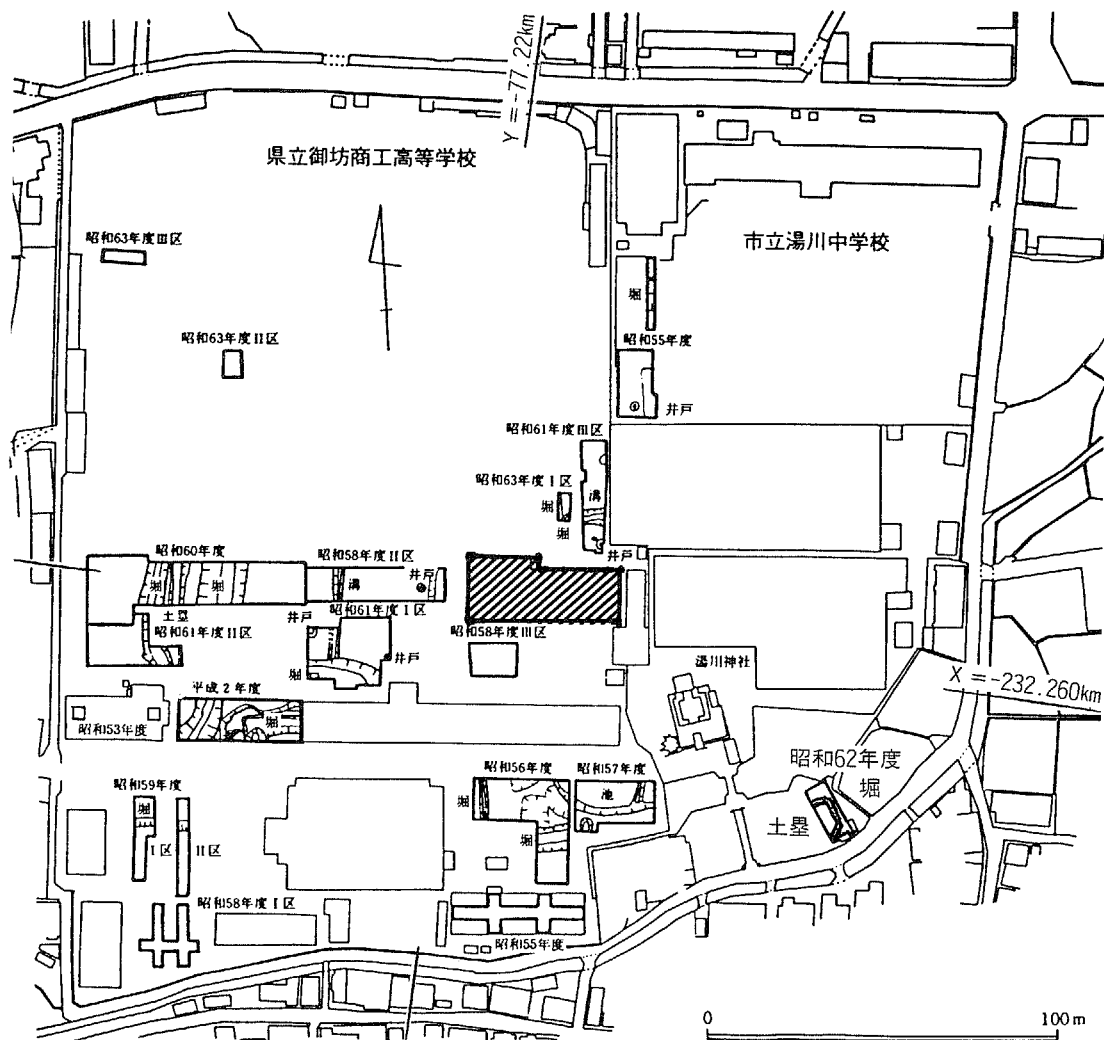


第15図 遺跡周辺図

2、調査の目的と経過

今回の調査目的は、大きくは三点ある。一点は、弥生時代の集落展開を見ることにある。小松原Ⅱ遺跡は弥生時代を中軸にする遺跡であるが、日高平野に展開する弥生時代集落は、他の水系と同じく、中期末に途絶し高地性集落に移動するが、その後の展開は他の水系と異なり、東郷遺跡で見たように後期前半段階資料が低地集落から検出される。このような例は、県下では東郷遺跡のみである。拠点集落である小松原Ⅱ遺跡では今までに後期前半段階の資料がないが、もし検出できれば高地性集落である亀山遺跡との関係など提起される問題は、限りなく大きい。この点が今回の調査で注意する必要がある。

第二点目は、16世紀代と推定される湯川氏館跡の存在である。既に調査例が蓄積し、水島大二氏によって館跡の復元図もつくられており、この点に関する検討が必要である。とりわけ今回の調査区が、ほぼ水島大二氏による館復元のなかでは、堀に囲まれた館の中心部に位置し、建物跡の検出が想定される地点に該当する。また、調査区の北側には、昭和63年度に御坊市遺跡調査会



第16図 調査区位置図

が調査し、堀を検出したⅠ区が存在する。調査では、堀の中心部分が検出され、それは南下している事が判明しており、今回の調査区で検出される事が推定できた。昭和63年度は調査区が小さいため、堀の幅や深さなど規模に関する十分な調査ができなかったが、この点を明確にする必要が今回の調査にかせられている。

三点目は、近世における調査区周辺の土地利用に関する事である。周辺部は、御坊市遺跡調査会が実施した昭和58年度Ⅱ区・Ⅲ区、昭和63年度Ⅰ区などの調査例があるが、これによると、今回の調査区の南に位置する昭和58年度Ⅲ区からは江戸時代の平面形が不整形で深さが一定しない粘土取り土坑が数多く検出されている。近世における当該地が、どのような土地利用をされていたのか、近世の発掘調査例が少ないため、課題としては大きい。

調査は平成8年2月1日より21日まで実施した。現代層約1.2mは、機械掘削を実施して除去し、それ以下は人力掘削で調査を行なった。包含層がなく、黄褐色シルト層・地山上面から弥生時代遺構、近世遺構を検出した。

測量は、機械掘削終了時までに実施した。平成5年度に（財）和歌山県文化財センターが実施した蛭田坪遺跡調査の際に金属標により設置された御坊駅前基準点1（X-232173、876・Y 777469、017）を使用した。調査区は座標北の4mの方眼をきった。この4m方眼は、遺物取り上げの最小単位であると共に、遺構実測の基準杭として使用した。実測図は、平面実測図（縮尺40分の1）・井戸平面、立面図（10分の1）・遺構配置図（60分の1）・土層断面図（20分の1）を作成した。遺構番号は、現場で使用したものを報告書でも使っている。

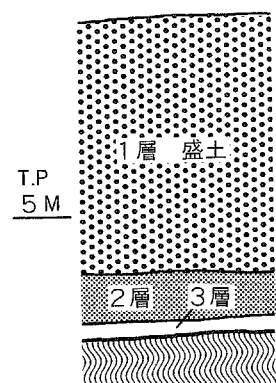
遺構写真は、6×7mmモノクロ・カラー、35mmモノクロ・カラーズライド撮影を行なった。

発掘調査と並行して、洗浄・註記・接合・実測・遺物写真撮影などを、また遺構・遺物のトレース・レイアウト作業、図版作成作業などの整理作業を実施し、遺構・遺物の検討をしたうえで、最終的に文章を作成し、3月29日には報告書の刊行に至った。

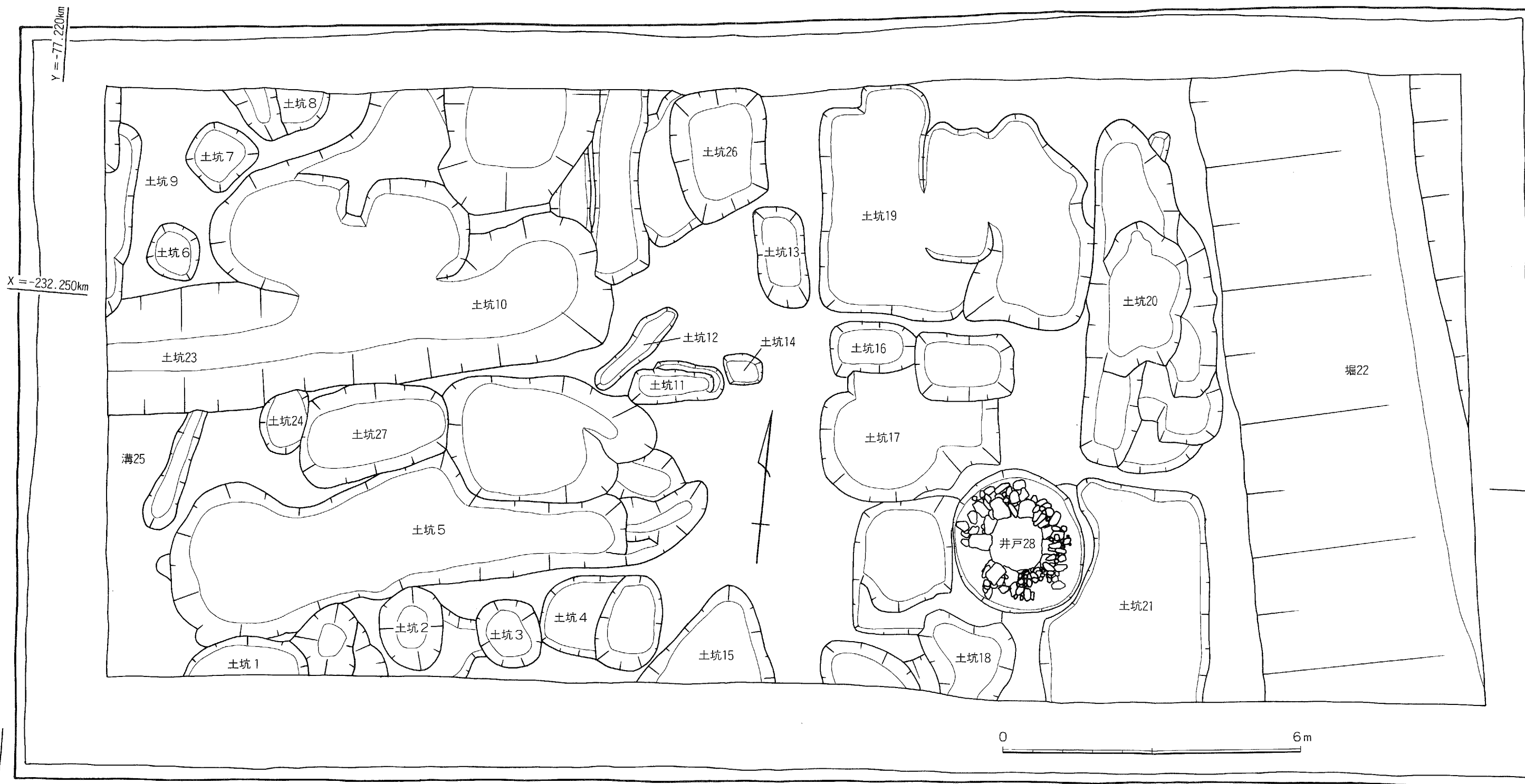
第2節 基本層序

格技場等建設予定地の現状は、校舎を解体し基礎コンクリートを撤去して埋め戻され更地になっている。現地盤高は、調査区の西端で5.58m、中心部で5.6m、東端5.63mを測り、わずかに東側の方が高い。また調査区北側と南側では、北側の方が僅かに数cm程度高い。

第1層は現代盛土である。約1m～1.4m前後を測る。この層を切って基礎コンクリートが打ち込まれている。第2層は灰色粘土層で、水田跡・畑跡と考えられる。現代遺物を含む。第3層は床土で第2層に対応する。第4層は全ての遺構のベースになる土で、黄褐色系のシルト層である。



第17図 土層模式図



第18図 遺構配置図

遺構のベースとなる標高は、西端中央で4.45m、中央部で4.644m、東端中央部で4.23m を測る。弥生時代中期段階の遺構面は、4.5mを前後する標高である。現代層である第1～3層 には、遺物はほとんど含まれず、包含層と呼べる層は存在しない。検出遺構は、全て同一面で検出し、層位による時期差は存在せず、切り合いでの前後関係によつての新旧が判明する。黄褐色系のシルト層がベースのため、遺構は明確に検出できた。検出した遺構の時期は、弥生時代と室町時代、江戸時代の三時期である。

第3節 遺構と遺物

今回の調査では、弥生時代と室町時代、江戸時代の各時期の遺構・遺物を検出した。遺構の種類には、溝・堀・土坑・掘立柱建物・井戸がある。最も多かったのが、江戸時代の粘土取り土坑と考えられる遺構である。この土坑群により、前代の遺構はほとんど攪乱を受け、破壊されている。弥生時代の遺構は少ない。室町時代の遺構は、堀・井戸である。

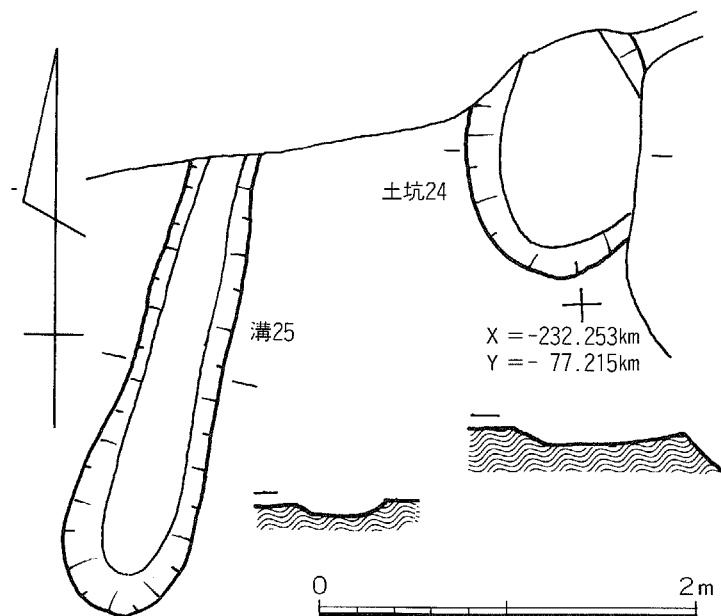
出土遺物は、コンテナで50箱程度出土した。出土遺物には、弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・瓦がある。時代は、弥生時代から中世後期・近世・近代に及ぶ。量的に最も多いのは、中世から近世にかけての瓦である。コンテナにして、28箱が出土している。一括遺物としては、弥生時代中期の溝・土坑出土遺物や室町時代堀跡遺物がある。また、遺構は確認できなかったが、奈良時代の須恵器がコンテナで約2分の1程度の量が出土している。

1、弥生時代

弥生時代中期の遺構は、調査区の西中央部で検出した。溝・土坑がある。両遺構ともに時期的にはほぼ同一時期の遺構である。また、後世の遺構からも原位置を失った弥生土器が調査区全域で出土している。

(1)溝25

幅90cm前後、深さ20cmを測り、断面U字形を呈する溝である。上面には2ヶ所にわたって、集中して弥生土器が出土した。一括遺物である。

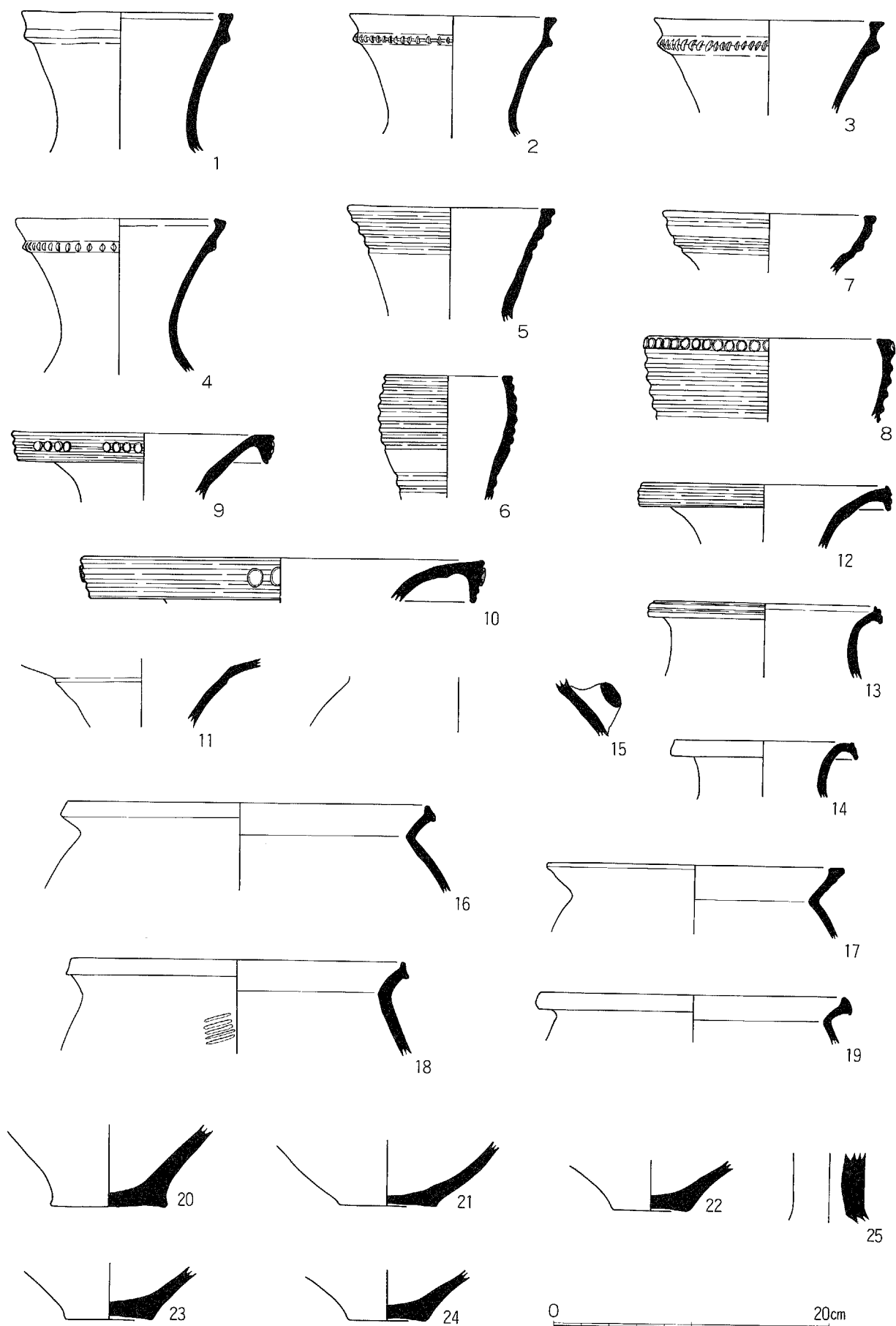


第19図 弥生時代遺構

堆積土は、灰色系統のシルト（Hue5YR 6/2灰褐色）で一層のみ堆積する。遺物は、壺・甕・鉢・高杯・器台が出土する。壺は、直口壺（26～29）細頸壺（30）・広口壺（31）がある。直口壺は、口縁部から頸部にかけて直線的にのび、口縁部直下に飾りを付けるもので、突帯文を付けるタイプとナデ調整による段で表現するもの（29）がある。細頸壺は凹線文を多用する（30）。28は、口縁直下に縦方向の刻み目文を持ち、突帯にも刻み目を施す。凹線文をもつ壺は、29は4条、30は7条存在する。広口壺は、わずかに口縁部を上下に拡張するものである。体部の破片（図版6上）で、櫛描の直線文と波状文をもつ壺がある。甕（33・34）は、くの字形に屈曲し、口縁端部が上方に突出するもの（33・34）である。体部外面に叩き目がある。色調は灰白色（Hue2.5Y 8/1）である。35は複合鉢・脚台付鉢で、凹線文と円形浮文で飾っている。この複合鉢口縁は36である。紀ノ川水系の太田黒田遺跡、亀川水系の岡村遺跡、南部川水系の片山遺跡、会津川水系の今福遺跡などで出土し、小松原Ⅱ遺跡でもほぼ完形の脚台付鉢が昭和60年度出土する中での今回の出土である。高杯（37・38）は、口縁部に凹線をもつ（37）ともたないもの（38）がある。脚柱部（37）も出土する。器台（40）は脚部の破片で、凹線文をもつ。水差し把手破片（32）もある。

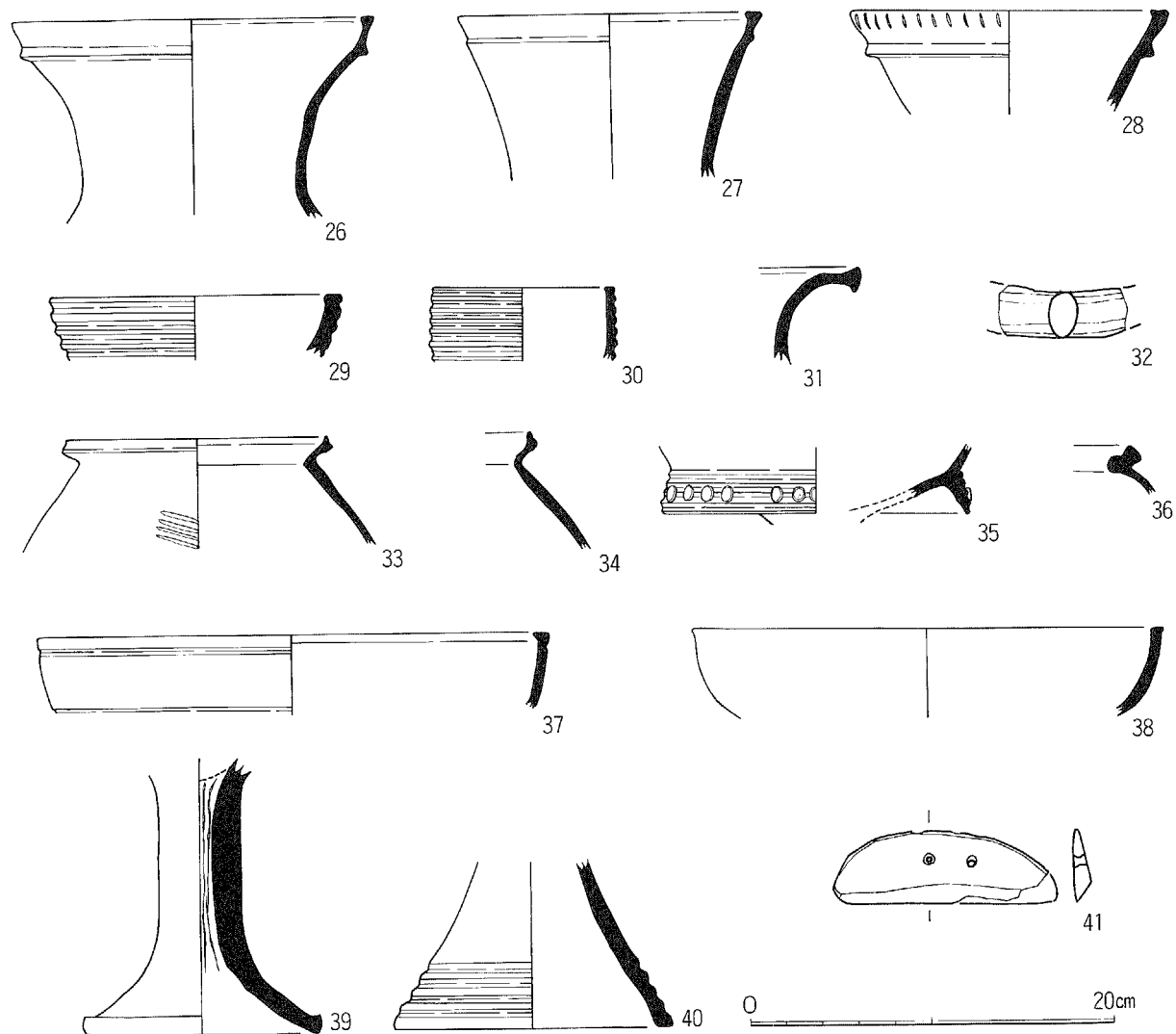
（2）土坑24

溝24のすぐ東で検出した。一辺1.3mの円形を呈し、深さ0.25mの土坑である。土坑内には下面まで弥生土器が密集して存在していた。堆積土は灰色系のシルト層である。遺物は、弥生土器が密集して出土した。一括遺物である。壺・甕・高杯が出土する。出土した全ての土器は器壁面が摩滅しており、調整技法など明確にわかる資料はない。壺は、直口壺（1～5・7）、細頸壺（6・8）、広口壺（9～14）がある。直口壺は、口縁部から頸部にかけて直線的にのび、口縁部直下に飾りを付けるもので、突帯文を付けるタイプ（1～4）と凹線文で飾るタイプ（5・7）がある。突帯文の壺は、突帯に刻み目を施すもの（2～4）と施さないもの（1）がある。凹線文をもつ壺は、口縁直下に連続した4条の凹線文をもつもの（5）、間隔をあけて2条の凹線をもつ（7）がある。7は口縁直下に端部の調整時に凹線を付け、また屈曲する頸部に凹線を付ける。細頸壺（6・8）は、口縁直下に連続した7条の凹線とすこし間隔をあけて下位に2条の凹線をもつもの（6）と凹線文の上に、口縁直下の位置に円形浮文で飾っている（8）壺は、口径からみて大型である。広口壺は、口縁を垂下させるもので、口縁端部には凹線を2～3条施すもの（9～10・12・13）と無文のもの（14）がある。凹線文を施す広口壺には、円形浮文を4個一単位で付けるもの（9）や1個を間隔をあけて付けるものがある。他に図化しなかった（図版8上）が、体部～頸部にかけての破片がある。体部から頸部にかけて、確認できるだけで6条の凹線文をもつ壺、同位置に竹管円形文をもつ壺、さらに頸部には凹線文を持ち、下位には櫛描簾状文をもつ壺などがある。壺の色調は、摩滅して地肌が見えるものが大半であるが、淡い灰白色（Hue2.5Y 8/1）の土器が多い。また一部10・13や櫛描簾状文をもつ壺などは、色調が違い、橙



第20図 土坑24 弥生土器 実測図

色 (Hue5YR 7/6) である。他地域からの搬入品か。水差しの壺 (15) は、頸部の破片である。12・13は形態からみてこの水差しの口縁部になる可能性がある。甕 (16～19) は、くの字形に屈曲する通有のもので、口径の大きさや口縁端部の上下への拡張の違いにより、区分できる。体部外面には細かい叩き目が見られる。色調は、灰白色 (Hue2.5Y 8/1) である。高杯の脚柱部 (25) もある。壺或いは甕の底部破片 (20～24) も出土する。底部内面は黒色を呈するものが大半であり、二次焼成を受けた底部もある。



第21図 土坑25 弥生土器 実測図

2、室町時代

調査区東端で検出した堀や井戸がある。遺構に伴わない当該期の土器は、調査区全域で出土する。

(1)堀22

調査区の東端で検出した。堀の西肩のみの検出で、東肩は調査区外に伸びるため、調査が終了し埋め戻しの時に、バックホーによって東肩を確認した。幅は6.5m前後、深さ60cm前後を測る。

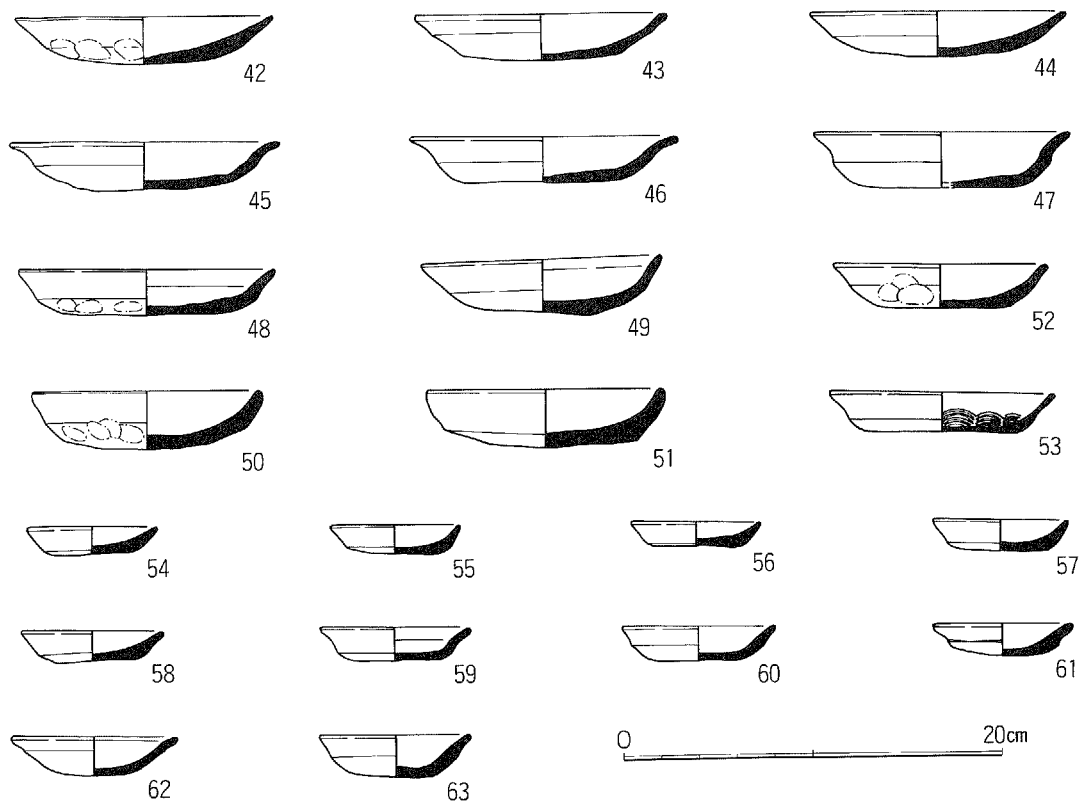
堀の肩は、浅く緩やかに落ちる。堆積土は褐色系統（Hue10 YR 4/4）のシルト層である。調査区の北で昭和63年度実施された御坊市の調査で、同じような深さの堀が確認されており、この堀に一直線につながる遺構と考えられる。遺物は少なく、丸瓦・平瓦が出土する。

(2)溝22-a

堀22を切ってつくられている。断面U字形を呈し、幅は1m以上・深さ0.3m以上である。黒褐色粘土層の堆積土である。昭和63年度I区で、溝が確認されており、その溝は曲がって南下しており、今回検出した溝と同一と考えられる。出土遺物は、コンテナで2箱程度の土師器皿とコンテナ8箱の瓦類が出土する。陶磁器類は、15世紀代の備前の甕、16世紀前半の備前摺鉢がある。時期的にはほぼ16世紀前半段階の一括遺物と考えることが出来よう。土師器皿は、口径により、大皿と中皿と小皿に三区分別できる。形態を規定する技法によって、主には口縁部のナデ調整により、細分が可能である。

大皿は、大きくは三区分別できる。Aタイプは42～44・Bタイプは45～48・Cタイプ49～51である。器高は三タイプともに同一である。Aタイプ（42～44）は、底部より斜め上方へ直線的に立ち上がる。口径は13.5cm～13.7cmで、器高2.5cmで規格性がある。口縁部へのナデ調整は弱い。口縁内部や見込み部分にかけては、不正方向のナデ調整を行なう。底部には板状の圧痕がある。43の底部には靦痕が残存する。胎土・焼成ともに非常に良好で、二系統の色調で、（Hue5 8/1灰白）・（Hue5 8/3淡橙）である。Bタイプ（45～50・53）は、口縁部へのナデ調整がきついため、口縁部が外反するものである。口径13.6cm～14.4cm、器高2.5cmである。口縁部のナデ調整がきついため、見込みの部分までナデ調整が行なわれる。色調は（Hue10YR にぶい黄橙色6/4）である。Cタイプ（49～51）は、口縁部はナデ調整によって内湾して立ち上がる。器壁が肉厚である。口径は12.5cm前後、器高2.5cm前後である。色調は（Hue5 8/1灰白）でAタイプと同一である。中皿は、口径11.3cm～12cmである。器高2.1cm～2.3cmである。53は底部に板目状の圧痕があり、内面見込みには同心円状の模様がある。小皿は、口径7～8cm、器高1.4～2.2cm前後であり、三タイプに区分別でき、小皿A、小皿B、小皿Cに別れる。小皿A、小皿Bは大皿A、大皿Bに技法・色調・胎土からみて伴うものである。小皿A（54～58）は、口縁部のナデ調整を行わず、内面には不定方向のナデ調整を行なう。大皿Aに伴う小皿である。小皿B（59～62）は、最も特徴的な小皿で、口縁部へのナデ調整がきついため、外反するものである。大皿Bに伴う小皿である。小皿C（63）は、器高が深いものである。煤の不着がある。口縁部内面から見込みにかけては、口縁部に沿って回転させナデ調整を行なうが、連続して行わず、一回ごとに止めて行なう。

時期は御坊市内の当該期編年が不確定のため不明ながら、備前摺鉢が共伴するところから16世紀代の土師器の一群と考えられる。



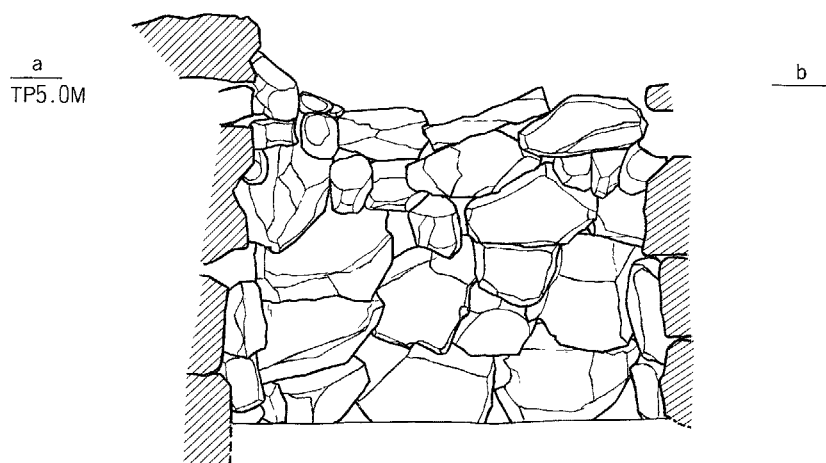
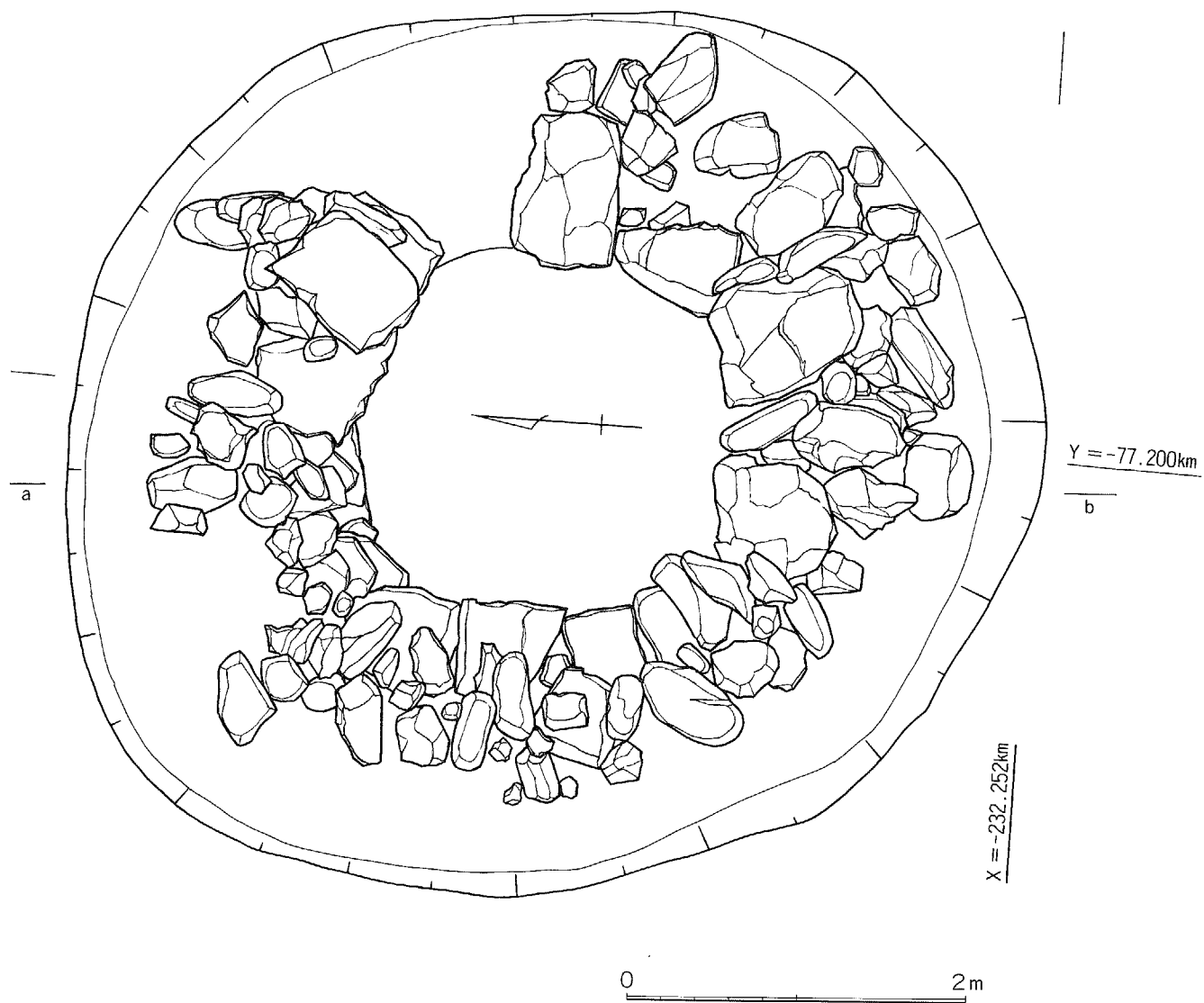
第22図 堀22 出土遺物実測図

(3)井戸28

石組の井戸である。掘り方は、2.6m×2.9mで楕円形である。掘り方は、東の土坑21と接するが、近世の土坑21は、井戸28を意識して掘られたのか、切り合いを持たず、掘り方は、井戸を避けて掘削されている(図版3下)。それ故、土坑21は不整形な形状を呈する。石組の井戸の直径は、1mを測り、深さは、1.1mまで掘り下げたが、それ以下は危険なため、未確認である。石材は河原石を使用し、直径0.3～0.4m前後の石が最も多く、他に0.1m前後の石も使用されていた。内側に、面をそろえている。堆積土は粘土層(Hue 10YR 暗褐3/3)である。遺物は、微量であるが、器種不明の土師器、陶器があり、瓦類はコンテナ2箱出土し、丸瓦・平瓦がある。

3、近世～近代

近世の時期の遺構が今回の調査では最も多く検出した。調査区内に一面に分布する土坑である。土坑10以外のこれら土坑は、不整形な形状を呈し、底面も凹凸が激しい。平面プランで見ると切り合い関係が存在するように見えるが、堆積土は同一色調・同一土質(Hue7.5 褐灰色4/2シルト)であり、礫が入る層と入らない層の区分だけで、単純な一層の遺構が多い。遺構間の切り合い関係は存在せず、短期間に埋められたと想定できる。それ故、掘削の時期は別かもしれないが、遺



第23図 井戸28 平面・立面図

構内に埋土が堆積する時期は同時期と考えらる。これらの遺構は、今回の調査区のすぐ南で、御坊市が昭和58年度調査した地区でも同じ遺構が検出されている。この調査区の周辺部は、近世段階で大規模に掘削されたと考えられる。これら遺構は、泉州方面でもよく検出されており、よく似た形状・大きさ・埋土である。良質の粘土を採取した土坑跡と考えられる。各遺構共に、近世の陶磁器類と共に、大量の中近世の瓦類と16世紀から～17世紀にかけての少量の中国陶磁器類が出土する。

(1)土坑 1

調査区の南西隅で検出した。平面円形を呈し、直径2.5m以上、深さ1.20mを測る。埋土は茶褐色系統の土で、一層である。遺物は、平瓦が一点と椀形の鉄滓が出土する。この鉄滓は、県文化財研究会の調査の際にも出土している。堺環濠都市でも出土するもので、形態から16世紀代と推定できる。

(2)土坑 2

調査区の南西隅で検出した。平面円形を呈し、深さ50cmである。埋土は茶褐色系統の土で、一層である。遺物は、16世紀中葉の瀬戸・美濃系天目茶碗、17世紀鋼後半の波佐見焼の染付皿、奈良時代の須恵器と思われる、壺或いは甕の体部破片一点、平瓦6点が出土した。

(3)土坑 3

調査区中央部南端で検出した。土坑4の西に近接する。平面形は円形を呈し、直径1.3～1.5cmを測り、深さは50cmである。埋土は一層である。出土遺物には、土師器皿3点、平瓦1点がある。

(4)土坑 4

調査区中央部南端で土坑3の東に近接して検出した土坑である。平面形は楕円形を二つ重ねたような形状を呈する。短辺1.6m～1.9m、長辺2.3mを測る。深さは、深い箇所38cm、浅い箇所8cmである。埋土は一層である。出土遺物は、器種不明の瓦質の破片、平瓦1点がある。

(5)土坑 5

調査区の西で検出した土坑で、平面形は細長く楕円形を呈する土坑である。長辺で10m以上、短辺で2m～2.7mを測り、深さは50cmから60cmで、ほぼ一定しており、凹凸は少ない。埋土は一層である。出土遺物は少なく、土師器皿、18世紀前半の刷毛目唐津片口鉢、18世紀の波佐見焼椀、18世紀後半の青磁染付筒形茶碗、椀形鉄滓、時期不明の備前鉢がある。また、瓦類は丸瓦・平瓦が出土する。

(6)土坑 6

調査区の西端北部で検出した。北には土坑7が存在する。土坑6～8は、近接して存在し、規模・埋土などよく似ている。平面隅丸方形を呈し、1.1m四方で、深さは20cmである。埋土は一層

である。出土遺物はない。

(7)土坑 7

調査区の西端北部で検出した。北には土坑 6 が存在する。埋土は一層である。平面隅丸方形を呈し、1.5m四方で、深さは84cmである。埋土は一層である。遺物は出土しない。

(8)土坑 8

調査区の西端北側で、約半分検出した平面楕円形を呈する土坑である。土坑は更に北に伸びる。一辺2.2mである。埋土は一層である。遺物も少なく、土師器片 1 点、丸瓦・平瓦が各 1 点出土したのみである。

(9)土坑 9

調査区の西端で検出した。遺構は更に西に伸びる。長辺3.9m以上、短辺0.3cm以上、深さ60cmを測る。埋土は一層である。出土遺物は少なく、土師器皿の破片、丸瓦・平瓦が出土する。

(10)土坑10

調査区西中央部で検出した土坑で、土坑23とは一連の関係を持つ遺構である。埋土は下層に粘土層、上層にはシルト層が堆積する。形状は、不整形で、円形を呈する土坑が二つと更に切り合い関係を持つような形で土坑が一つ存在する。底部はそれぞれが凹凸を示し、本来は別々に掘削された物が、埋める段階で同一の埋土で埋めたため、堆積土に違いが生まれなかったものと想定される。上面からの遺構検出では埋土は同一で、調査に際して同一の堆積土であった。出土遺物は、量には今回の調査では最も多い。種類は瓦がほとんどを占め、コンテナで10箱出土する。土器類は微量の土師器皿が出土するのみである。陶器類は、16世紀の備前壺、摺鉢、甕、16世紀後半の瀬戸灰釉皿などが出土する。また18世紀代の波佐見焼の染付碗も出土する。磁器類は、遺構の時期よりは古い物が多く出土する。16世紀前半の景德鎮窯系青花碗(74)、16世紀末から17世紀にかけての福建省青花列点文碗 (76)、江永窯陶胎染付など16世紀代に中心を持つ遺物がある。瓦類は多く、軒平瓦・軒丸瓦・線刻を持つ鳥衾瓦 (91)・丸瓦・平瓦など出土する。埋土は、最も新しい遺物が18世紀代の物であるところから、その時期以降に埋められたものと想定できる。瓦類は古く、14世紀代に遡るものもあり、量的にも多いため、その時期には既になんらかの掘立柱建物ではなく、礎石建物、即ち瓦葺きの建物が確実に存在していたものと考えられる。

(11)土坑11

調査区のほぼ中央部で検出した、平面楕円形を呈する土坑である。短辺80cm、長辺170cmを測り、深さは30cmで、底部はU字形を呈する。埋土は一層である。19世紀代と考えられる磁器類と丸瓦・平瓦が出土する。

(12)土坑12

調査区のほぼ中央部、土坑11の西で検出した、平面楕円形を呈する土坑である。短辺60cm、長

辺220cmを測り、深さは9cmで、底部はU字形を呈する。埋土は一層である。出土遺物はない。

(13)土坑13

1m×2mの長方形を呈する土坑で、深さ25cmを測る。埋土は一層である。産地不明の中世と思われる陶器の甕、丸瓦・平瓦が各一点出土している。

(14)土坑14

調査区のほぼ中央部、土坑11の東で検出した、平面楕円形を呈する土坑である。短辺80cm、長辺1mを測り、深さは10cmで、底部はU字形を呈する。埋土は一層である。出土遺物はない。

(15)土坑15

調査区のほぼ中央部南端、土坑4の東で検出した、平面不整形な楕円形を呈する土坑である。短辺2.2m、長辺2m以上を測り、深さは30cmで、底部は平坦である。埋土は一層である。出土遺物はない。

(16)土坑16

調査区のほぼ中央で検出した。土坑17に接する。楕円形を呈する土坑で、1m×1.7m、深さ50cm前後で底面がU字形を呈する。埋土は一層である。出土遺物はない。

(17)土坑17

調査区のほぼ中央で検出した。不整形な土坑で、3.7m×2.6m、深さ30cm前後で底面が平坦である。埋土は一層である。出土遺物は、土器類は16世紀代、白磁端反皿で高台内に「角福」とあり、また16世紀から17世紀の越州窯系の青花碗、丸瓦3点、平瓦1がある。

(18)土坑18

調査区の南端、井戸28の南で検出した土坑で、平面不整形な楕円形を呈する。長辺2mを測り、深さ51cm前後で、底面は平坦である。埋土は一層である。出土遺物は土師器片、16世紀末から17世紀前半の備前焼摺鉢(81)、16世紀後半の美濃瀬戸系天目茶碗(72)などがある。他に鉄滓も出土する。

(19)土坑19

土坑20の西で検出した。方形の土坑が三つ重なり有った状態で検出した。長辺5.2m、短辺4.6mを測る。深さは28cm前後で、底面は平坦である。埋土は一層のみである。出土遺物は、土師器皿が量的には多く、コンテナ1箱分程度出土した。土師器皿は、口縁部の大ききで、大・小の二種類に区分できる。陶磁器類は、15世紀代の龍泉窯系青磁陵花皿、16世紀前半代の龍泉窯系青磁線描蓮弁子碗(73)、16世紀後半代の美濃瀬戸系の天目皿(71)、16世紀後半代の景德鎮窯系青磁鉢(79)、16世紀末から17世紀代の越州窯系青花、19世紀代の土瓶などがある。また瓦は、コンテナで1箱出土し、丸瓦・平瓦がある。鉄製品の火鉢も出土する。

(20)土坑20

調査区の東端、堀22の西中央部で検出した。平面不整形で、凹凸が非常に激しく、短辺2.6m、長辺7.2mを測る。深さは、最も深いところで、89cmで、段々状に成っており、66cm、72cm、19cmなどである。埋土は一層である。出土遺物は、土師器大皿・小皿、15世紀代の龍泉窯系青磁 碗(78)、16世紀代の白磁端反皿がある。

(21)土坑21

調査区の東、南端で検出した。室町時代井戸28に接するが、遺構を意識して掘り方より外側に、不整形に堀込んでつくっている。2.1m×4.3mで平面形は長方形を呈し、深さ54cm前後で、底面は平坦である。埋土は一層のみである。出土遺物は、土師器皿、16世紀代の備前摺鉢と17世紀代の同じく備前摺鉢、16世紀前半の瀬戸・美濃系の天目茶碗、16世紀代の福建省・広東省の壺がある。瓦類は、丸瓦・平瓦・軒丸瓦がコンテナで2箱出土している。

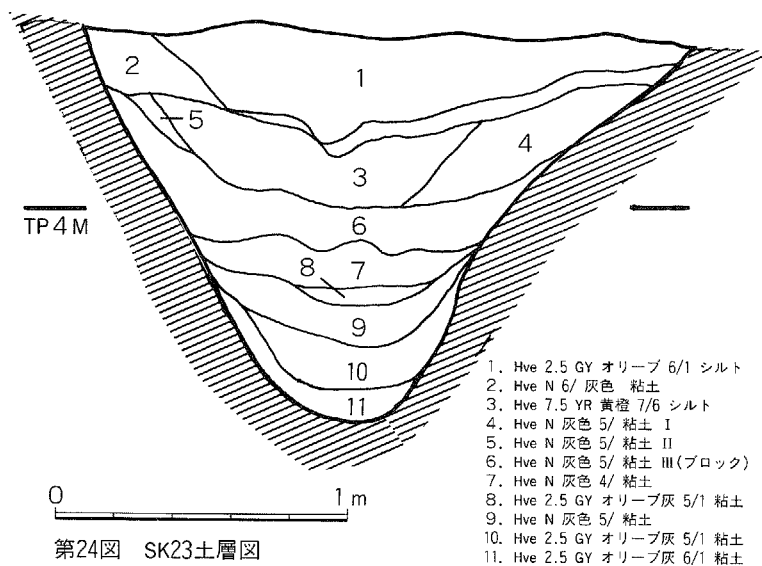
(22)土坑23

調査区西端中央部で検出した。土坑10につながる遺構で、溝状を呈する遺構である。幅2m、深さ1.17m前後を測り大規模である。土坑10と同じく粘土取り土坑と深さや堆積土などで違いが存在する。堆積土は、砂層を挟んで粘土層があり、水の流れを示す状況である。土坑10が完結する遺構であり、土坑23が溝状の遺構で、流れを示す堆積土であるため、両者で水溜め状の遺構になる可能性がある。出土遺物は、遺構の大きさに比較して少なく、土師器皿、微細な小破片ながら10世紀から11世紀にかけての黒色土器碗A類の高台部破片1点、15世紀代の龍泉窯系青磁碗、16世紀末～17世紀初の福建省青花碗(75)、備前甕、丸瓦3点、平瓦10点が出土する。

(23)土坑26

調査区中央部北端で検出した。2m×2.7m、深さ66cmの隅丸方形の土坑である。埋土は茶褐色

系統のシルト層である。出土遺物は土師器小皿2点、16世紀前半の美濃瀬戸系灰釉丸皿(70)、16世紀後半の瀬戸灰釉皿(69)、16世紀末から17世紀前半の備前甕(80)など古い時期の遺物の他、18世紀代の遺物が量的には数多く出土する。18世紀代の遺物には、堺摺鉢(82)、波佐見焼碗、陶胎染付、炮烙などが出土する。また、瓦類は丸瓦・平瓦



が各1点ずつ出土する。遺構内出土の遺物から18世紀代のものと考えられる。

(24)土坑27 調査区西部中央で検出した。楕円形を呈する土坑で、短辺1.8m、長辺2.8m、深さ50cmを測る。埋土は一層である。出土遺物はない。

4、原位置を失った遺物

今回の調査区からは、原位置を失った遺物がかなりの数量出土する。時期は、弥生時代中期・奈良時代・平安時代・室町時代にわたる。原位置を失う最大の原因は、近世段階の遺構による攪乱である。

(1)、弥生土器・石器

総破片数で、352点の弥生土器が原位置を失って出土する。近世土坑4・5・8・10・18～20・22・23・28で、ほぼ調査区内全域から出土した。摩滅した小破片が多い。遺構に伴って出土した土器群と同時期である。石包丁(38)は、土坑21から出土する。緑泥片岩製である。

(2)、奈良時代土器

原位置を失って出土した奈良時代の土器は63点ある。それらは、近世土坑4・5・10・18～21・23・26などほぼ調査区内全域から出土し、壺(67)・甕・鉢・杯(64・66)・皿B(65)・盤A(68)がある。

(3)、平安時代

小破片の黒色土器B類体部が土坑23より1点のみであるが出土する。高台は断面三角形を呈する。10～11世紀代のものか。

(4)、室町時代

近世の遺構からは大量の瓦が出土したが、これらはほとんどが室町時代に所属する。また、国産及び中国製輸入陶磁器類も出土する。陶磁器類は各遺構中に記載した。

瓦 瓦は、軒平瓦・軒丸瓦・丸瓦・平瓦・鳥衾瓦が出土する。原位置を失った遺物である。時代も最も古いものは、鎌倉時代後半の14世紀前半の時期から、15世紀代にかけての瓦が出土する。土器では瓦器が一点も出土しない点から、14世紀中葉以降に設定できるかもしれない。軒丸瓦(83～87)は、全て巴文である。87以外、焼成は良好である。

83は軒丸瓦で、瓦頭面には離れ砂がある。巴文は時計回りに巻き込み、頭部の先端は尖り気味である。尾は長く伸び内側の圈線につながる。外側には圈線が一条巡る。珠文は蜜にめぐる。周縁巾は狭く、周縁高は高い。丸瓦部内面には布目がある。14世紀前半の資料か。土坑10出土。84は軒丸瓦で、巴文は反時計回りに巻き込み、尾は長く伸び、内側の圈線につながる。外側には圈線が一条巡る。珠文は蜜にめぐる。土坑10出土。瓦頭面には離れ砂がある。珠文は83に比べて荒い。85は軒丸瓦で、土坑10出土。瓦頭面には離れ砂がある。巴文は時計回りに巻き込み、尾は細かくのび、内側の圈線につながる。外側・内側の圈線はない。86は軒丸瓦で、土坑10出土。完形

である。巴文は時計回りに巻き込み、尾は細かく伸び内側の圈線につながる。丸瓦部分の外表面は丁寧にナデ調整を縦方向に行なう。87は軒丸瓦で、土坑28出土。巴文は反時計回りに巻き込む。巴の頭部分は接する。珠文は存在しないが、巴文の外側に2条の圈線が巡る。焼成は悪い。

88は軒平瓦で、土坑23出土。連珠文を郭線で囲む。83に対応する軒平瓦であろう。89は軒平瓦で、土坑10出土。簡略化した均等唐草文を郭線で囲む。

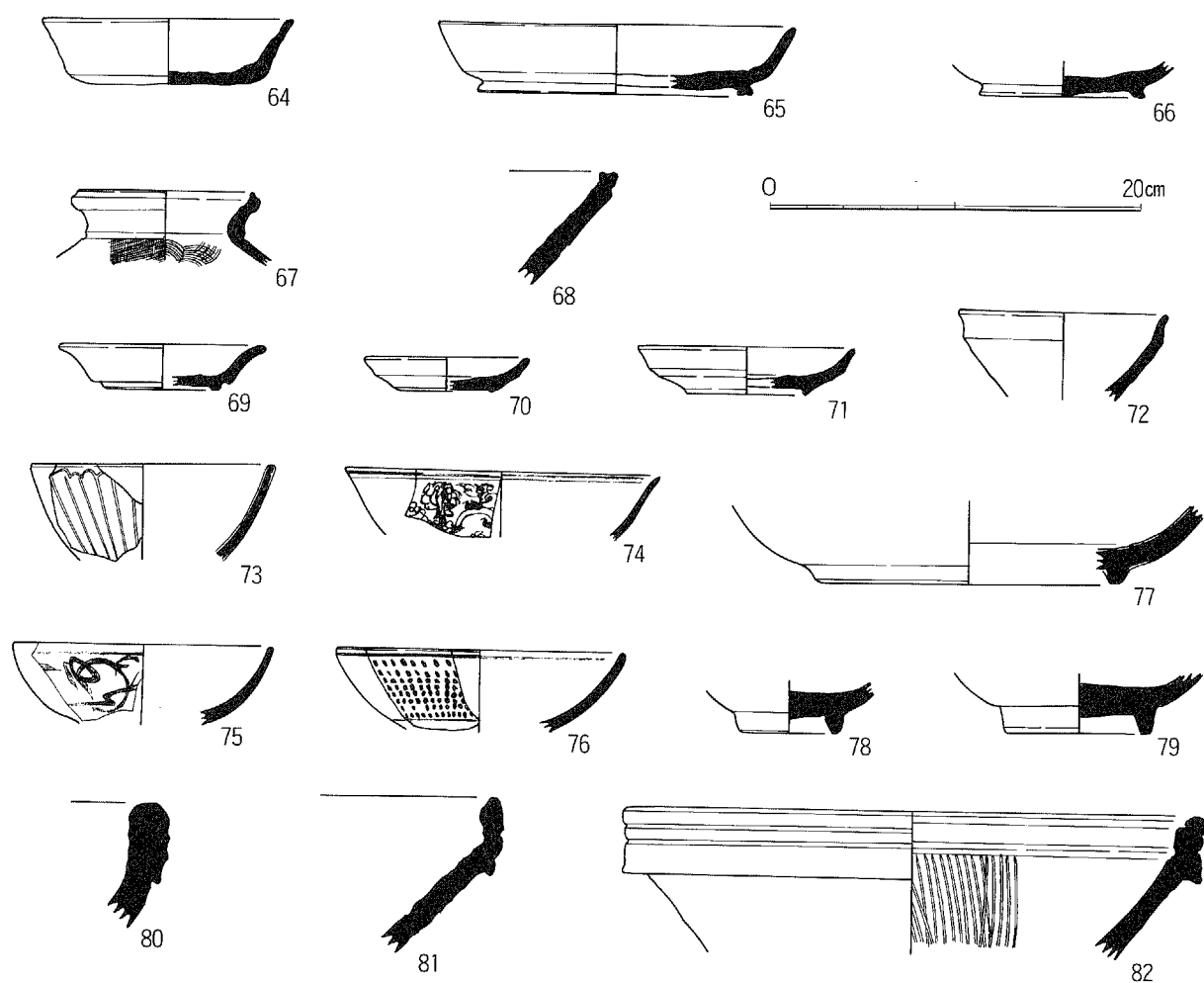
90は丸瓦で、土坑28出土。内面には布目痕が残る。

91は鳥衾瓦で、土坑10出土。外面には線刻がしてあり、右から左にかけて、

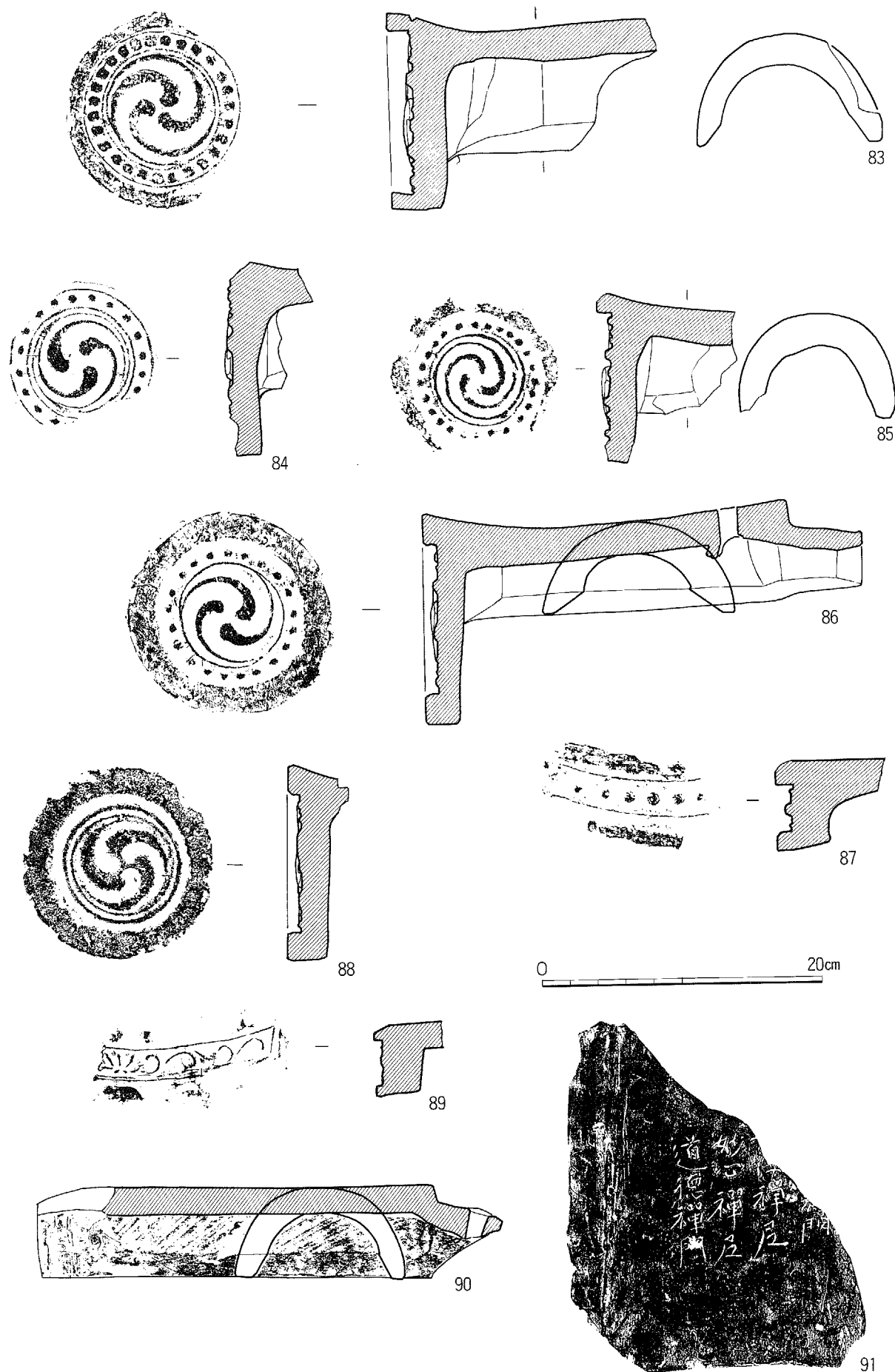
・・禅門 ・・禅尼 妙心禅尼 道德禅門

男女の名が書かれている。室町時代後半段階のものか。

昭和62年度の調査では、「天正四年 子丙 六月」と窺描された平瓦が出土しているが、この遺物よりは少し古いか。



第25図 奈良時代須恵器・中近世陶磁器 出土遺物 実測図



第26図 瓦 実測図

第3章 まとめ

今回の調査地点は、小松原Ⅱ遺跡と湯川氏館跡が重複する地点に該当する。小松原Ⅱ遺跡は日高川流域の弥生時代の拠点集落として、湯川氏館跡は室町時代の在地豪族湯川氏の小松原館跡として著名な遺跡として周知されている。今回の調査によっても、弥生時代中期（Ⅳ様式古段階）の土坑や溝、室町時代の井戸・堀、近世の土坑群など、周知されていた時期の遺構・遺物が検出され、また奈良時代の遺物も出土した。本遺跡の提起する問題は多岐にわたるが、とりわけ、湯川氏に関連すると想定される堀跡の検出など特記すべき点が多い。

第1節 弥生時代

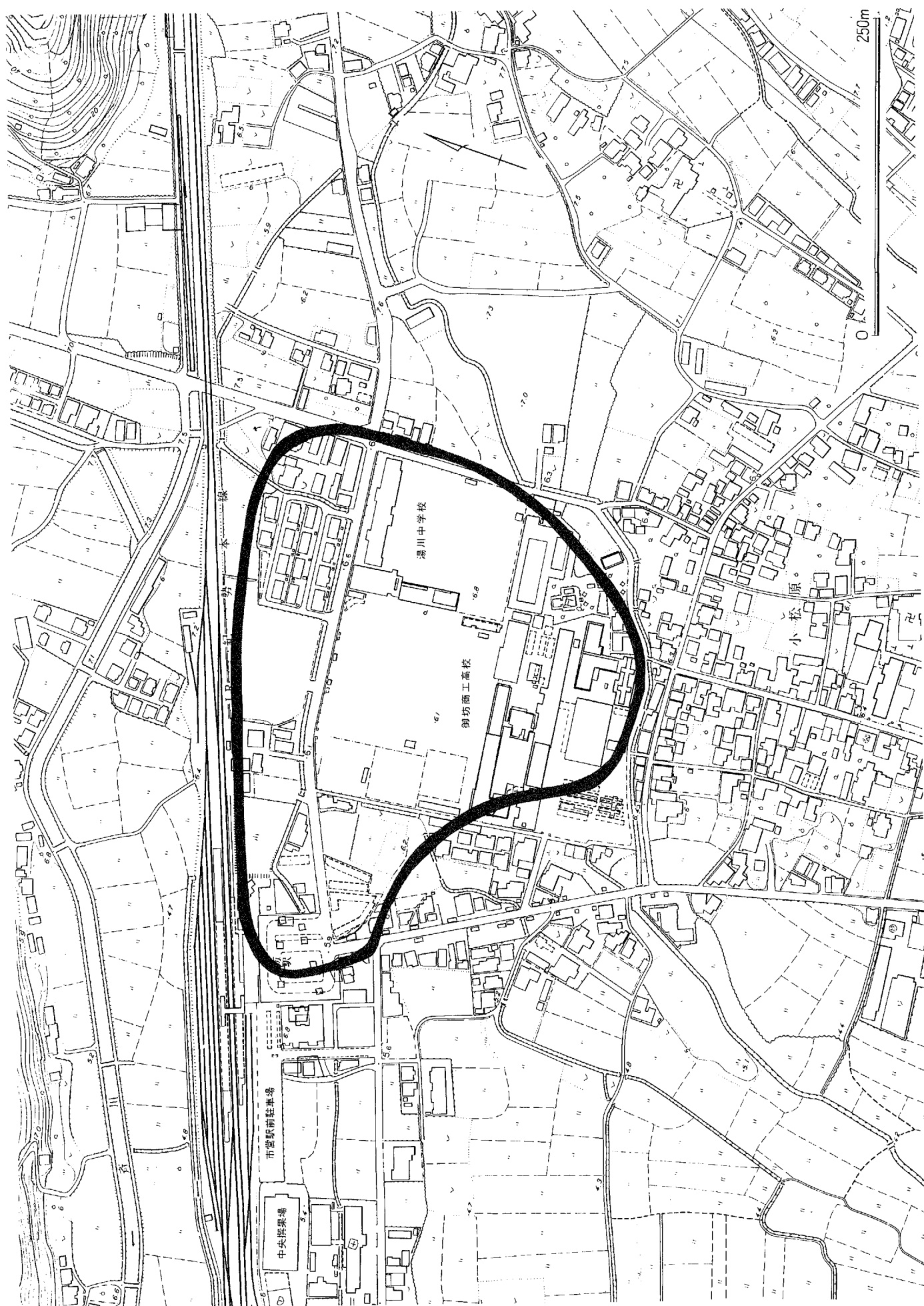
和歌山県の地形は、紀ノ川水系以外は河川下流域に沖積平野が展開する。各河川は、山間部に阻まれ、独立した様相を呈する。水稻耕作が生産の主要な局面を占める弥生時代にあっては、沖積平野の持つ意味は大きく、当然ながら集落が水田近くの微高地に、河川別に営まれる。現在までの考古資料を見ると、この河川単位での集落形態は、弥生時代前期・中期の時代の在り方に規制されて大きな特徴がある。それは河川下流域で、各個別に集落は散在して存在するのではなく、核となる集落、すなわち拠点集落は、ひとつに集約され存在するという点である。この拠点集落は、水田に近い微高地に位置し、集落の回りには大きくて深い溝、環濠を巡らす。弥生時代後期からのち、再び低地に集落を営む時期には、この核となる集落形態を持つ地平から大きく離脱し、視覚的には集落は散在して存在する。

1 小松原Ⅱ遺跡環濠の復元

小松原Ⅱ遺跡で検出した弥生時代の主な遺構・遺物は、県立御坊商工高等学校内で、昭和58年Ⅱ区の中期の溝・土坑、昭和60年度・昭和61年度Ⅰ区の溝、昭和63年度Ⅲ区の調査などがあり、遺物は、昭和60年度の自然木堆積層より、弥生時代前期の研磨され黒色化した底部とへう描き沈線文をもつ壺が出土している。また同一地点の下位より縄文時代後期の深鉢が出土している。紀陽銀行建設の事前調査では、前期末から中期にかけての時期の幅3、5～5m、深さ1.4mの規模を持つ溝が検出されている。

これらの考古資料の蓄積と地形を参考にしながら、大胆かつ細心に小松原Ⅱ遺跡の環濠を復元すると、標高5m前後の自然堤防上を中心に立地する東西400m、南北300mの規模を持つ大規模な集落であることが推定できる。

環濠北限の根拠は、環濠より外の北側は、集落内とした自然堤防の標高より低く、いわば後背湿地となる場所である。東限は、御坊市遺跡調査会が実施した湯川中学校の東側の校庭外の試掘



第27図 小松原II遺跡 環濠復元図

調査で、弥生時代の遺構は確認されず、低地・湿地帯の状況を呈した。それ故、湯川中学校の北東に位置する富安から発する谷部の延長線上に該当すると考えられる。南限については、湯川神社の南を流れる小河川が地形や規模から推定して、環濠に該当すると考えられる。西限は、駅前周辺で調査した際に検出した大溝が環濠と想定され、その溝が昭和60、61年度の県立御坊商工高等学校内で検出した溝と位置や地形から推定してつながると考えられるためである。

2、小松原Ⅱ遺跡の周辺と遺跡の性格

環濠集落である小松原Ⅱ遺跡の周辺には、東には古墳時代前期の集落遺跡である津井切遺跡や弥生時代から古墳時代にかけての富安Ⅰ遺跡が、西には弥生時代から古墳時代の遺跡である蛭田坪遺跡が、北には小松原Ⅰ遺跡が位置する。これら遺跡群のうち、富安Ⅰ遺跡は古墳時代中期の大規模な遺跡であり、北西方向の丘陵上にはこれら集落の墓域と考えられる鳳生寺山古墳群が位置するが、弥生時代中期の住居跡や方形周溝墓など検出されており、小松原Ⅱ遺跡と小河川を挟んで分断されながら、同時期に存在していたと考えられる。

小松原Ⅱ遺跡は、遺跡の規模や日高川流域での立地、継続時期などからみて、水系の拠点集落であり、有田川水系の拠点集落である田殿・尾中遺跡と同じく環濠集落と考えて間違いない。田殿・尾中遺跡の立地する有田川水系の沖積平野は面積が小さいが、日高平野は県内では紀ノ川水系に次ぐ二番面の大きさである。水田の規模も大きく、稲の生産量も有田川水系とは比較にならないほど大きかったと想定できる。それ故、谷部や小河川を挟んで、小松原Ⅱ遺跡の立地する自然堤防周辺に数多くの遺跡が生まれたのである。稲作の大きな生産量を背景に、和歌山県の中枢部に位置する環境を生かしながら、日高川水系の弥生時代集落は、考古資料に見るように他地域との交流を深め大きく発展した。

3、和歌山県拠点集落の動向と日高平野弥生時代後期前半の様相

和歌山県の拠点集落の動向は、弥生時代前期から中期まで継続し、中期末から後期前半にかけては高地性集落に移動するが、日高川水系も同様で、小松原Ⅱ遺跡のすぐ北の丘陵上に位置する亀山遺跡に移動する。今回の調査でも、小松原Ⅱ遺跡には弥生時代中期の資料が存在したが、後期の遺構はもちろんのこと遺物も一点も出土しなかった。拠点集落の小松原Ⅱ遺跡では後期前半の資料は、今のところ確認できない。しかし、小松原Ⅱ遺跡の東に位置する平地の東郷遺跡では、後期前半の遺構・遺物が確認されている点が他の水系の動向と大きく違う点である。のちの弥生時代後期後半から古墳時代初頭の時期にかけての東郷遺跡にみる各地からの搬入土器の多さも、同時期の有田川水系田殿・尾中遺跡の搬入品のなさに比較して大きく相違する。日高平野の弥生時代から古墳時代にかけての地域史構築の問題点を指摘し、今後の大きな課題としたい。

4、複合鉢・水差し型壺の出土と遺構の性格

県下では出土例が少ない脚台付鉢が、小松原Ⅱ遺跡の2例目として今回の調査で出土した。周

辺部では、東郷遺跡で複合鉢の可能性をもつ破片が出土している。南部町の砂丘上に立地する片山遺跡では、弥生時代中期後半（Ⅳ様式）の墓地跡が検出され、土坑墓から副葬品の性格を持たされ、共に底部穿孔された複合鉢と水差し型壺がセットになって出土している。このセット関係をもって出土する土坑墓は、片山遺跡では2基確認されている。会津川水系の砂丘に位置する今福遺跡でも複合鉢の破片が出土している。南部川や会津川水系では、砂丘上に墓地を形成する可能性が高く、今福遺跡も墓地の可能性がある。

この二つの土器は、日高川水系以南では、副葬品としての性格を持たされ、墓地跡から出土する例が極めて高いと考えられる。今回の調査で水差し型土器と複合鉢が溝・土坑から出土したが、これらの遺構は、片山遺跡や今福遺跡の例から推定して、墓地の性格を持つ可能性が高く、それ故、溝・土坑は、方形周溝墓の可能性が考えられる。

直口壺の出土量も多い印象をもつ。今後、土器の問題も多岐に展開していく必要がある。

第2節 湯川氏館跡

文献によれば、湯川氏館跡の成立時期は、天文18（1549）年といわれる。しかし、今回の調査例や今までの考古資料の蓄積からみれば、湯川氏の館跡かどうかは不明ながら、前身となる遺構が存在していた可能性が高い。弥生時代小松原Ⅱ遺跡の環濠復元に見るように、この地域が日高川水系では最も生活を営む適地・地形であり、また近世土坑に破壊され遺構は検出できないが、奈良時代の土器が出土することから、官衙・郡衙の地として推定されるように、各時代を通じて、小松原は日高川水系の中心として土地利用されてきたことは間違いない。

1、湯川氏館跡より前代の様相―鎌倉時代寺院跡の推定―

中世の段階で最も古い時期の遺構は、自然流路から文永5年（1268年）銘をもつ扇骨と相伴して出土した土器・木器類がある。これらは観音寺跡とされる有田郡吉備町野田地区遺跡から出土した溝出土遺物と構成は同じであり、位牌や六字名号を記した笹塔婆など仏教用具が主である。さらに14世紀第Ⅳ四半期になると、土坑などが昭和61年度の調査で検出されており、また今回の調査においても、鎌倉時代後半、14世紀前半段階に該当する巴文をもつ軒丸瓦や連珠文をもつ軒平瓦などが出土している。それ故、鎌倉時代には、寺院関係の礎石建物が存在していたことは間違いない。それも、出土遺物から見るように、浄土宗系の寺院が存在した可能性が高い。出土瓦に見るように、近辺の老若男女が、寺院に瓦を寄進し、あるいは供養した姿が沸き上がる。15世紀になると、溝・土坑などが検出される。

2、湯川氏館跡の復元

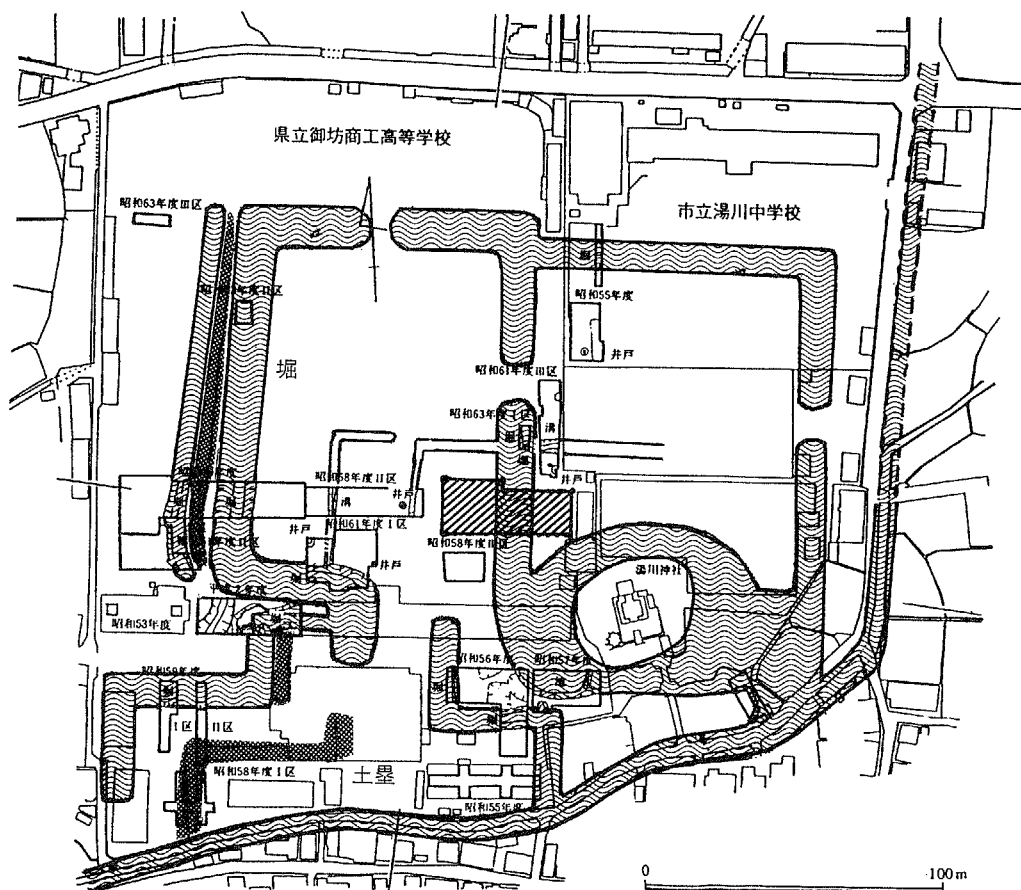
16世紀になると、湯川氏館跡に関係する遺構が検出される。特に目をひくのは、大きな堀と小さな溝、土塁及び井戸の存在である。大きく外敵から内部を防御する堀と土塁の存在、さらに内

部を区画し分け、排水の機能も合わせもった溝の存在、さらに生活を営むうえで必要不可欠な水、井戸の存在である。

現在までの考古資料の蓄積と水島大二氏復元図を参考にし、また今回の調査で検出された南北に走る堀や周辺の地形を参考にしながら、さらに初代湯川氏は武田氏の一族で、つながりが深いため、永正16年（1519）築城を開始し、約60年間にわたって使用されたとされる武田信玄のツツジが崎館跡も参考にしながら、大胆かつ細心に、湯川氏館跡の復元すると、東西200m・南北200mで約4万㎡の規模を持つ、館跡が復元できる。

館跡復元の根拠は、東限については、弥生時代小松原Ⅱ遺跡環濠復元の根拠としたように、湯川中学の東側は低地・湿地帯であり、さらに現在の富安から流れる小河川が、大きくJ R線路の手前、すなわち北側で西に向かって曲がるが、J R線路がつく以前は、真っすぐ南方向に流れ、湯川神社東側を流れていた可能性が高い。南限は、現有の水路が環濠復元の際にも推定したように、小河川が東から西に走っており、それが南の堀、或いは自然な小河川を利用した堀の可能性が高い。北限はすでに調査により確認された堀が根拠である。

北東に位置する富安から流れる小河川や南を走る小河川などを利用して館を築城したものと推定できる。館は、東西に長く方形に囲む外堀を持ち、中央部は南北方向に走る堀によって大きく二分される。東側と南側は、小河川が存在するため防御はしやすいが、西側は手薄なため、二重の堀が構築され、堀間には土塁が存在するという構造が推定できる。南西隅には入口があり、そ



第28図 湯川氏館跡復元図

れは土塁によって防御される。二区分された内部には、堀と平行或いは直行する溝によって、きれいに区画され、内部には礎石建物が建ち並ぶ。館の中には、中国製の輸入陶磁器を使用する湯川氏が存在し、単に住むだけの空間ではなく、ふいごの羽口や鉄滓にみられるように、鉄砲や刀、或いは日常の鉄製品を作る鍛冶屋など生産集団も一緒に住んだことが推定できる。

県下には、室町時代15世紀から16世紀にかけての遺跡は、那賀郡岩出町に根来寺遺跡がある。根来寺遺跡は、すでに永い年月をかけ膨大な調査費を注ぎ込み、提示された論考は少ないが、考古資料は数多く蓄積され、遺跡の一端が把握されている。湯川館跡周辺には、亀山城は当然のこととして、御坊市には野口城跡、同じ郡内からは南部川村の大規模な山城・平須賀城や南部町市谷山城も調査され考古資料が蓄積されている。県内には、当該期の様相の一端を復元できる資料が、紀北・紀南共に存在し、歴史復元も可能な状況にあるため、遺構や地形が中心となる城郭研究者と城郭の蓄積が少ないが遺構・遺物に関しては蓄積が多い考古学研究者との相互研鑽によって、さらなる検討・展開が必要であろう。

第3節 近世の土坑について

昭和58年の調査でも75箇所も検出された近世土坑の存在が、今回の調査においても数多く検出された。不定形で浅く掘削された土坑群である。これら土坑の検出できる地点はほぼ限られており、今回の調査区から西側の部分と南部分であり、井戸跡が検出できる箇所と重なる。この土坑に、よく似た形状・規模・深さの遺構は、大阪府の南部、堺から以南の泉州地域においてもよく検出され、時期も江戸時代のものである。これら土坑群の性格であるが泉州地域では、平面形が不整形である点や一部分が深く掘削される点などを根拠にして、良質の粘土を採掘するための粘土取り土坑と考えられている。調査区内や今までの調査から検出された遺構も、形状や深さなどにより粘土取り土坑と推定されよう。粘土取りの目的など今後の大きな課題である。

小松原Ⅱ遺跡環濠復元図や湯川氏館跡復元図については、御坊市遺跡調査会川崎雅史氏と現状の考古資料を検討し、討論する中で作成した。

参考文献

永光寛「片山遺跡A地点発掘調査概報」和歌山県教育委員会 1978・3

永光寛「今福遺跡」和歌山県教育委員会 1987

中世城郭研究 第6号 城郭研究会1992

川崎雅史「平須賀城発掘調査概報」南部川村教育委員会 1994



全景(東より)



土坑24 遺物出土状況(東より)

図版2 遺跡 弥生時代遺構 土坑24・溝25

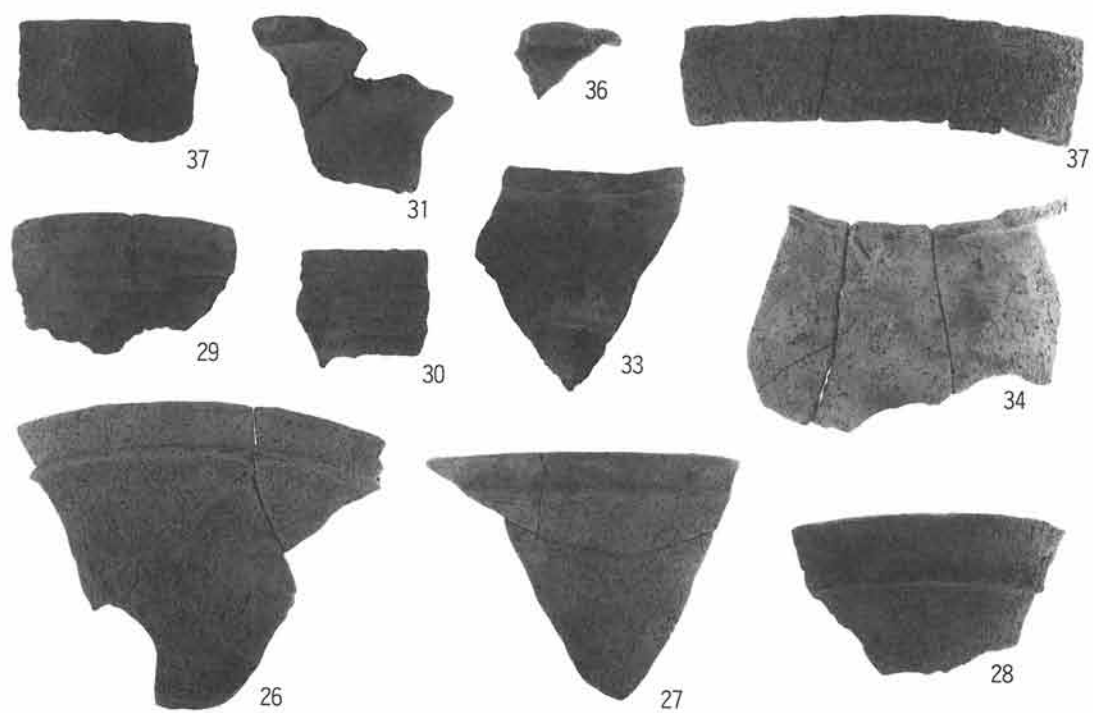
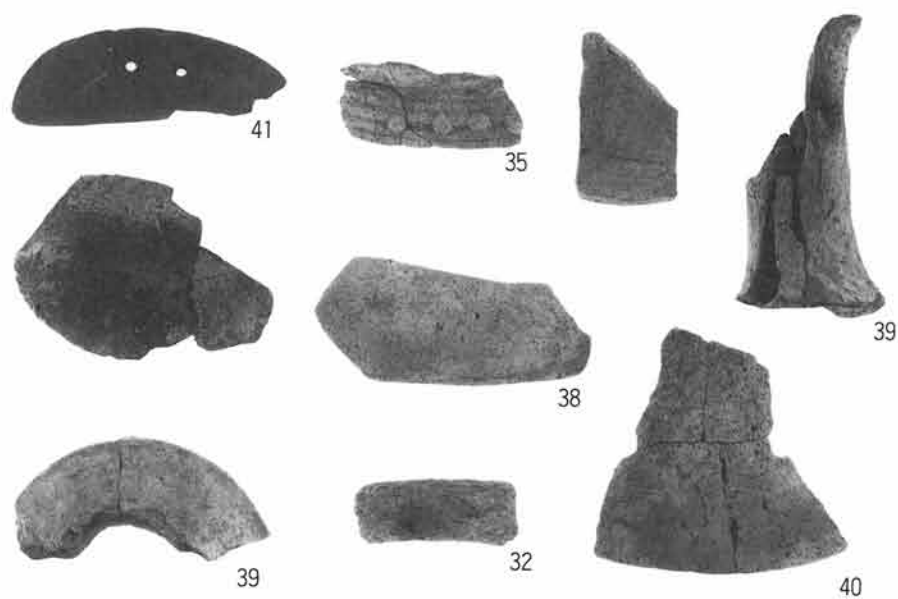


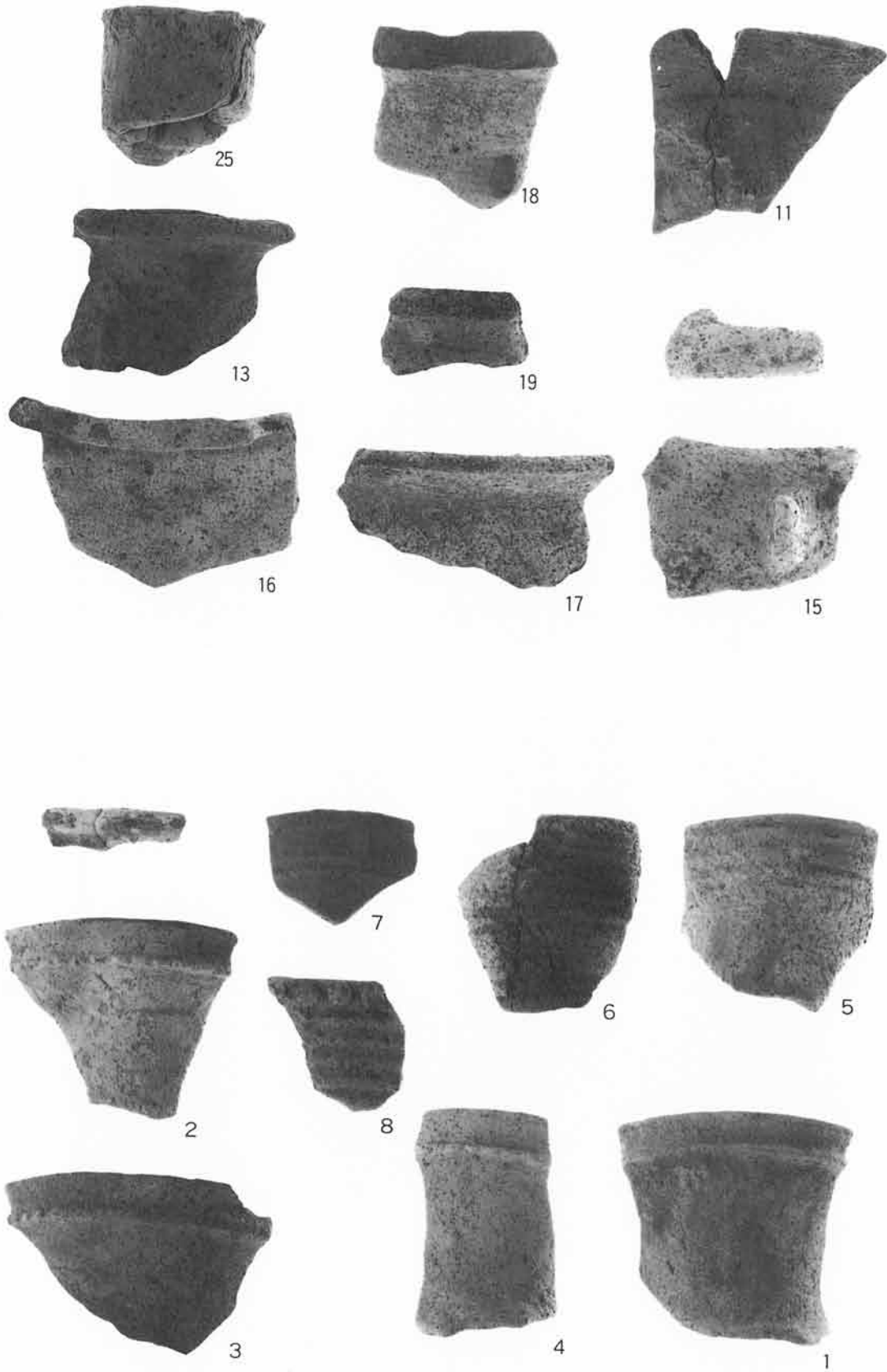


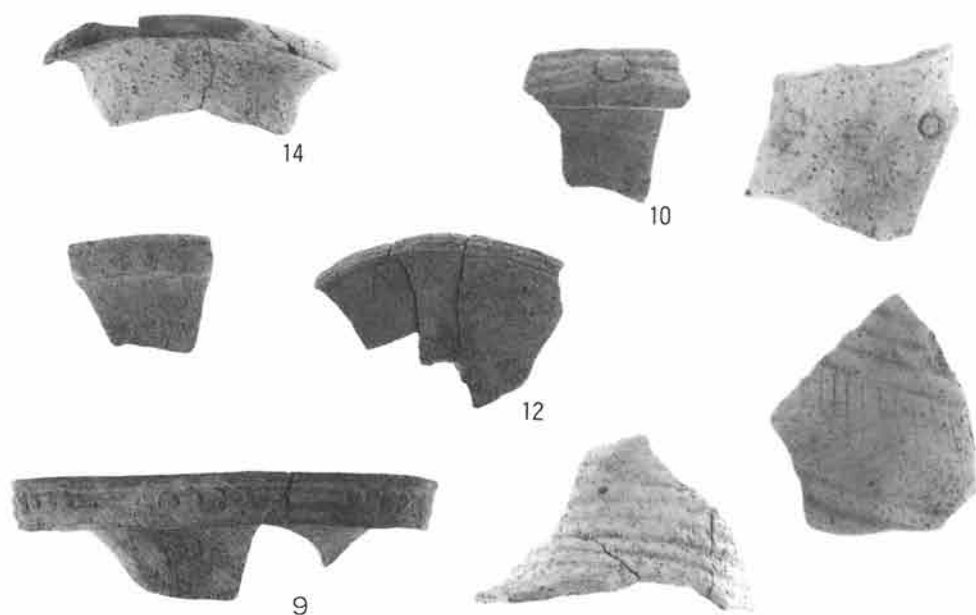


図版5 遺跡 土層断面







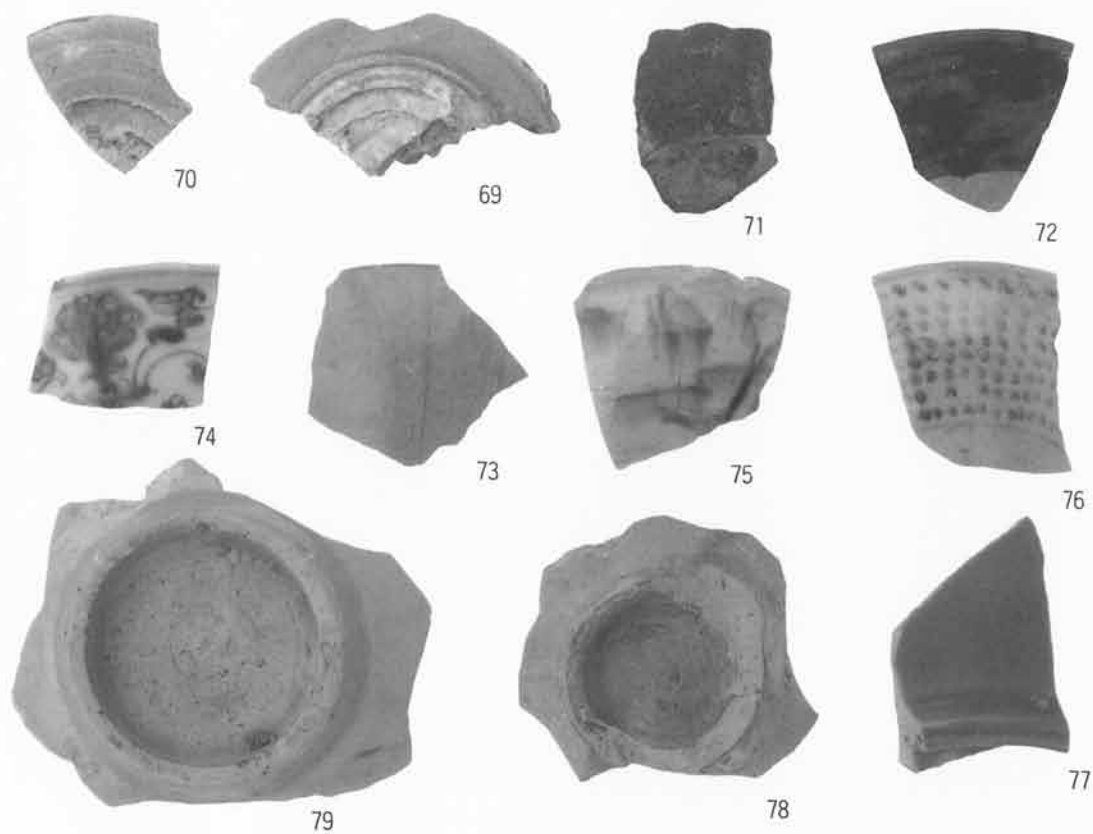


土坑24





奈良時代遺物



中近世陶磁器



83



88



84



87



85



89



86



91

報 告 書 抄 録

ふりがな	こまつばらにいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書 名	小 松 原 II 遺 跡 発 掘 調 査 報 告 書							
副 書 名	県立御坊商工高等学校体育施設整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査							
編 著 者 名	渋谷高秀							
編 集 機 関	(財)和歌山県文化財センター							
所 在 地	〒640 和歌山県和歌山市広道20番地 Tel 0734-33-3843							
発行年月日	西暦 1996年 3月29日							
フリガナ 所 収 遺 跡	フリガナ 所 在 地	コ ー ド		北緯	東経	調査機関	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こまつばら いせき 小松原II遺跡	わかやまけんごぼうし 和歌山県御坊市 ゆかわちやうこまつばら 湯川町小松原	3020580	2 4	77度 22分 20秒	232度 25分 30秒	1997・1 ～ 1997・3	404㎡	校舎改築に 伴う発掘調 査
所収遺跡名	種 別	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項		
小松原II遺跡	集落跡 中世館跡	弥生～中世		弥生土器 土師器 中世土器 中世瓦・近世陶磁器		湯川氏館跡に関連す ると想定できる堀跡 を検出		

小松原II遺跡発掘調査報告書

1996・3・29

編集発行 (財)和歌山県文化財センター

印 刷 和歌山印刷所